
モブおん！！only-all-original

大台

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モブおん！！only-all-original

【Nコード】

N65010

【作者名】

大台

【あらすじ】

けいおん！！のモブキャラを主とした小説です。スタートは3年の始業式。エリ・アカネ＋オリ主を中心にしました。運動部の話になりますので、本キャラはあまりでてきません。ほとんどオリジナルで処女作となるので、読みにくいと思いますがぜひ呼んでください。感想、意見、批判などよろしく願います。

スタート!!（前書き）

はじめまして、大台おおだいといます。前から書きたかったモブ中心を思い切って書いてみました。

処女作なので読みにくいと思いますが、ぜひ意見、感想よろしくお願いします。

鮮血先生丁寧な対応ありがとうございました。

それではどうぞ。

スタート!!

現在 7 : 5 5

春、ある少年は駅のホームをひとりで歩いていた。

彼の名前は河野修紀。（かわのしゅうき）

今年、私立桜ヶ丘高等学校の3年生になった。

桜ヶ丘高校は彼が入学する年、3年前に共学化した元女子高だ。

彼は中学時代野球をしていて、かなりの数の高校から声がかかっていた。

そんな彼がなぜこんな高校にいるかというと、桜ヶ丘高校もとい桜高は共学化にともなって

スポーツの発展に取り組むことになった。

彼は硬式野球部の基盤を造るために特待生として招かれたのだ。
ちなみに現在主将を務めている。

そして入学したもうひとつの理由が・・・

- - - - -

？「修紀」おっはようん！」　ゲシッ！！！

修「ノワッ！」　バタッ！！

俺ははいきなり蹴りをいれられ豪快に転んだ。

？「箱舟？」

修「意味わからん。お前の蹴りに対するリアクションだ」

蹴りを入れた本人の意味不明のボケに軽く突っ込んでおく。

今あいさつ代わりのとび蹴りを入れてきたのは「瀧エリ」

茶髪のサイドポニーの女子。俺と同じ3年でバレー部主将、も
ちろん特待生。

？2「修紀くん大丈夫？」

修「うん、なんとか」

心配そうに声をかけてきたのは「佐藤アカネ」

長身で青みがかった黒髪おさげの女子。3年でエリと同じバレー部で副部長。

こちらも特待生。

実はエリ・アカネとは小学校から一緒に、最初は3人で同じ少年野球チームに入っていたが

エリとアカネは中学に上がると同時にバレーの道を選んだ。

3人とも中学総体で関東大会まで進んだので、進学の際に3人ともかなりの数の高校から

どうせならということと一緒にところを選んだ。

桜高になったのは唯一自転車通学（約50分）できる学校だからだ。

電車だと1時間以上かかるのだ。

今日は朝練なしだから電車通学なだけで、普段は3人で必死に自転車漕いでいる。

ちなみにエリに蹴られた場所は駅のホームのど真ん中なわけであって人目も多いので

かなり恥ずい・・・

修「なんでエリは朝からハイテンションなんだよ！」

エ「だって今日クラスがえじゃん。テンションも高くなるでしょ」

ア「でも蹴ることはないでしょ？エリ」

アカネは呆れ気味にエリに注意している。

ア「今年は3人とも同じクラスがいいな」

エ「去年は見事にばらばらだったしね」

修「去年のエリはひどかったよな。『アカネと一緒にがいい』っ

て『号泣（笑）』

「エ「い、言わないでよ」（泣）思い出したくなかったのに・・・」

ア「かわいかったよ、泣き顔のエリ」

エ「ア、アカネまで」

そのあとエリは学校に着くまでずっとすねていた。

- - - - -

現在 8：10。場所は学校の講堂前。ここにクラス分けが貼り出されるのだ。

エ「ふたりとも～あつたよ～!!」

いつの間に機嫌がなおったのか、エリが掲示板の前で跳ねている。

ア「相変わらずきりかえはやいよね」

修「まったくだ。さっきまで口も聞かなかったのに」

呆れ気味に修紀とアカネはエリの真後ろにいった。

修「んで、何組なんだ？」

エ「3人とも2組！！」

ア「ほんとに？エリ見間違えてない？」

アカネが意地悪っぽくエリに聞くとエリは

エ「間違っていないよ！見てみてよ！」

修「あんまりいじるなよアカネ、またすねるぞ。」

ア「冗談、冗談」

俺の忠告にアカネは舌を出して笑顔で答える。

アカネと一緒に掲示板を見ると、

修「なんかな・・・」

ア「そうだね」

エリ「ふたりともどうしたの？」

ふたりで戸惑っているとき、エリが聞いてきた。

修「エリはなににも違和感がなかったのか？」

エ「なにが？」

ア「クラスのほかの子みたの？」

エ「見てないよ。ふたりの名前探すのに必死だったから」

修「修紀とアカネはやっぱりとため息をつく。」

ア「えっとね、同じバレー部の三花、軽音部は4人ともいるでしよ、生徒会長の真鍋さん、

ソフト部の姫子ちゃんとか名前しってるひと多すぎない？」

エ「そういえばそうだね。でも野球部って修紀だけ？」

ア「ほんとだ。男子も3人だけだね」

修「まあ気にしないけどな。多いと逆にめんどいし」
なぜだか分かんが、男子が多いと冷たい視線が飛んでくるこ
とが多くなる。特に文化部から・・・

ア「そろそろ教室行こ。遅刻になっちゃうよ」

アカネの一言で俺とエリは時計を見た。

現在 8：25、俺たちの高校生活最後の1年が始まる。

スタート！！（後書き）

修紀「読みにく！！硬！！」

大台「うるせい！！緊張したんだよ」

修紀「こんな作品をよんでいた方、本当にありがとう」

大台「お前が言うな！作品は不定期更新ですが、なるべくはやく更新したいと思います。」

修紀「言ったな。じゃあ今から書け。」

大台「いまから学祭の準備だよ！」

修紀「2話はいつになることやら・・・」

修・大「今後もモブおん！！only-all-original
をよろしく願います。」

オリ主紹介（前書き）

オリ主の紹介です。野球部ですが丸刈りではありません。

オリ主紹介

河野修紀《ここのしゅうき》

身長 177cm

体重 70kg

髪型 黒髪のショートカット、てっぺんがとんがっている

部活 硬式野球部、キャプテン

ポジション 捕手

性格 基本的にかたい、たまにキャラがくずれるときが

ある、努力家

その他 エリ・アカネとは幼馴染で家が近所。小学校からずっと同じ。

自転車通学はエリがいいだした。朝基本的にアカネと一緒に迎えに行く。

野球の实力はスカウトがくるほど。

特待生として招かれたが、まだ甲子園にはいけて

いない。

始業式から放課後（前書き）

大台「一回間違って全部消しちゃった（泣）」

修紀「へっへっへざまあみろ」

大台「お前本編と性格違いすぎるだろ」

修紀「紹介に書いただろたまにキャラ崩壊するって」

大台「そっいえばそうだった」

修紀「お前が書いたんだろ」

大台「まあどうでもいいや。この話はアニメ版を交えながら次のオリジナルに繋げるためのものです」

修紀「いい加減だな。それではどうぞ」、

始業式から放課後

現在 9 : 5 0

講堂にて始業式の真っ最中。

校長の長くてつまらん、この小説の作者のような話を右から左に聞き流している

・
・
・
・
・

（ふつつならここで作者が出てくるんだがな、相変わらずのダメ作者が）

大台【うるせい！課題がおわんねえんだよ！】

【山中さわ子】吹奏楽部と軽音部の顧問。エリいわく学校一の美人教師らしい

最近は「黒歴史」なんて噂も流れてくるが・・・

そういえば山中先生が入ってきた直後にエリとアカネが

「ラッキーだね、山中先生が担任で。美人だし優しそうだし」

「そうだね」

なんて会話をしていると、後ろの席の田井中が

「だまされたらダメだよーさわちゃんってじーっわー」

ってなことを言っていたが、なぜか田井中が途中で話すのをやめてしまった

よくわからなかったが気にしないことにした。なぜか殺気も感じたことだし・・・

「それじゃあ、9：45までには講堂にはいつていてね」

そしてくじ引きの結果、俺の席は教室のと真ん中、左前にはエリ、正面はアカネという感じだ。

言い出しの田井中は1番前だ、ざまあみろ

「なんか微妙なとこだね」

「うん、よくもなく」

「悪くもなし、か」

エリの感想にアカネと俺は同感する

結局学校がおわったのは11:10

田井中のせいで少し長びいた。くそ、せつかくの休みなのになどおもっていると

「修紀、今日部活休み？」

「おう。休みだけど？」

「エリがね鎌倉行こだって」

「大仏か？」

「もちろん！そして食べ歩きも！！」

「アカネは？」

「別にいいけど食べ歩きはちよつと・・・ね」
アカネがぼそぼそとつぶやくと

「太っちゃうから？大丈夫だよアカネスタイルいいし」
エリはアカネのスタイルをうらやましそくに眺める

「そうそうアカネは十分細いし大丈夫だよ」

「そう・・・かな／＼」

エリと俺の言葉を聞いてアカネは顔を真っ赤にしてうつむいて
いる

（か、かわいい）

「そ、それじゃ今から行く、ね？」

「そ、そうだな。アカネ行くぞ」

「う、うん／＼」

（かわいい）

エリと俺は思っていることを顔に出さないようになんとか
えながら鎌倉に行くべく
駅へと向かった。

始業式から放課後（後書き）

大台「どうでしたか、まだまだ未熟ですがなんとかやっていきます。」

修紀「短いな」

大台「仕方ないだろ、眠いんだよ」

修紀「ネタ切れだけは避けるように」

大台「はい・・・」

大台「次回は鎌倉に繰り出します」

修紀「お楽しみに」

鎌倉！！（前書き）

大台「そういえば少し形式を変えたのを忘れてました」

修紀「」の前に名前つけなくなったよな」

大台「こっちのほうがやりやすかったんだ」

修紀「どっちでもかまわねえけどな」

大台「さて、今回は鎌倉編前半（予定）です」

修紀「なんで予定なんだ？」

大台「2話にわけたいんだが自信がない」

修紀「文才なしめ」

大台「そういえば、みなさんエリの仏像好きはご存知だったでしょうか」

修紀「一応公式プロフィールにのってるよ」

大台「それではどうぞ」

鎌倉！！

現在 11:25

桜高校門前

今日は野球部もバレー部も休みということで俺とエリ、アカネの3人でどこか行こうということになった。

予定を考えているとエリが

「鎌倉行こ！鎌倉！！」

と言い出した。目的は大仏と食べ歩きらしい。

アカネもしぶしぶ了承したので今からいくことになった。

ちなみにアカネはダイエット中だったらしい・・・

現在地駅前、鎌倉行きまでまだ10分以上ある

「そっいえばお昼どうするの？鎌倉まで1時間以上あるよ」

アカネがハツと思い出したように言った。そもそもお昼の相談してたらこの話に発展したのだ

「エリなにか考えているのか？」

と俺が聞くと、エリはふっふつふと不敵な笑みを浮かべひとさし指をびしつとさして

「もちろん。電車で行くんだよ、電車の旅といえば駅弁でしょ！
」

「・・・なんというか」

「単純というかアバウトというか」

俺とアカネは半ば呆れ気味に売店に行くエリを追いかけていった

「おばちゃん、これとこれちょうだい」

「スーパーデラックス大関弁当とコーラだね。1200円だよ」

エリがおばちゃんに渡してるの弁当は運動部男子でも食べきれないような超巨大弁当だ。中身はほとんど肉
ちなみにエリはこれをものの10分で食べることができる。はじめてみたときはびっくりした。

「修紀とアカネはどれにするの？アカネはわたしといっしょの
いよね？」

「そんなの食べきれないって、おばさんわたしは幕の内弁当で」

「俺は普通の大関弁当で」

「ぶー、アカネのいけず」

「そんなの完食できるのは桜高ではお前ぐらいだ」

エリの愚痴を軽く流してアカネと俺も弁当を買った

現在 12:10

場所は駅のホーム

いまちょうど俺たちが乗る電車がきた

これにのれば13時過ぎには鎌倉に着くだろう

さっそく電車に乗り込む

長いすに横並びに座ると、さっそくエリが弁当をあけだしたそれにつづいて俺とアカネも弁当をあける

アカネの弁当はいかにも女性らしい和風のきれいな弁当だ。それに対してエリのは・・・

「なに？」

「いや、なんでも・・・」

エリがステーキをほおばったまま聞いてきた。エリの弁当は肉ばかりの超男弁当
ほんとに食いきるところがすごい。なぜこんなにスタイルがいいのか
いまだに不明だ

『次は〜鎌倉〜鎌倉〜』

1時間ぐらい経つとアナウンスが聞こえてきた

「おい、エリ、アカネ起きろよ」

ふたりをゆすつて起こす。弁当を食い終わるとエリは知らない間にねてしまい、アカネもつられて寝てしまったのだ

乗り過ぐすといけないので俺はずっと起きていた。

「修紀くんごめんね」

「かまわねえよ。それよりエリがまだ・・・」

「えへへ、あと5分だけ」

エリは何回よんでも起きない

「おいていくか・・・」

「そうね・・・」

「おいていかないでよ!!」

アカネとそんなことを言っていると、エリがいきなりガバッと起き上がった。聞こえてたのか

「冗談、冗談」

「冗談に聞こえなかったよ!!」

エリがかなり怒っていたが、俺とアカネは笑いながら電車を降りていった

現在 13:30

場所は鎌倉大仏まえ

駅を出るとエリはとんでもないスピードで大仏のある高德院に行ってしまった

「エリってあんなに足はやかっただか？」

「部活のときはもっと遅かったような・・・」

アカネとエリの足の速さに驚いている

「ふわぁ〜大きい〜」

当の本人は大仏を目の前にして感激の声をもらしている

「帰るのは何時になることやら」

現在 15:30

未だに大仏まえ

あれから2時間が経ったが、エリはまだ大仏の周りをうろうろしている

エリは大仏を見だすと周りの声が聞こえなくなり、なにを言っても無駄なので

アカネと鶴岡八幡宮まで行って、そのあと3人分のアイスを買って戻ってきた

今はベンチに座っている

「ふっ、満足満足」

エリがベンチにむかって歩いてきている。ようやく終わったようだ

「そういえば、アカネ神社でなに買ってたんだ？」

「ふふ、実はね、はい」

アカネがかばんから3つの色違いの『大願成就』とかかれたお守りをとりだした

「お守り？」

「うん。私たち今年がいろいろと最後でしょ。だから修紀くんは甲子園、エリと私はインターハイにでられますようにって」

「アカネーありがとー!!」

「ありがとな、アカネ」

「ふふ、どういたしまして」

エリはオレンジ、俺は緑のお守りをそれぞれ受け取った。アカネは青だ

「さて、そろそろ帰ろうか」

「そうだね、明日は部活あるし」

「がんばんなきゃね」

俺が帰ろうと促すと、意外にあっさりと帰ろうとエリとアカネもなった

どうやらエリもアカネのお守りに影響されたそうだ

「そういえば修紀くん、今週の土曜日試合だよな」

「おう。公式戦でな」

そう、今週末は予選を勝ち抜いたため、春の県大会なのだ。相手は
関東No.1だけど・・・

「試合は昼からだよね、練習のあと応援に行くから」

「ありがとうな。アカネ」

「ボロボロにやられると観に行つてあげるよ（笑）」

「うるせい！今度こそ勝つから！！」

エリにちやかされながら駅にむかう

現在 16:00

場所は鎌倉駅

夕日に染まる駅前を3人は鞆につけた色違いのお守りを揺らしなが
ら帰っていった

鎌倉！！（後書き）

大台「完全オリジナルです。いかがでしたか」

修紀「びみょーだな」

大台「そうだな、結局1話でおわっちゃたし」

修紀「まあ、オリジナルをだらだらやられてもだるいな」

大台「また、ご意見、批判よろしくお願いします」

修紀「次回は部活編です」

大台「それでは」

八・幡・宮！！（前書き）

修紀「鎌倉は1話で終わるんじゃないの？」

大台「ふっふっふ、実は隠し持っていたんだよ」

修紀「エリほったらかして行ったやつか」

大台「そうだよ。それでは鶴岡八幡宮編です」

修紀「今思うとほったらかしはひどいよな」

大台「うるせい！それではどうぞ」

八・幡・宮！！

現在 13：50

場所は鶴岡八幡宮

エリが仏像モードに入ってしまったため、アカネと2人で鶴岡八幡宮に来ている

エリの仏像モードは1時間半〜2時間、その間はエリは自分の世界に入るので何を言っても無駄である

その時間どうしようということ、アカネと八幡宮に行こうということになったのだ

今は本宮の正面の鳥居のところにいる

「人あんまりいないね」

「そうだな。平日のまっ昼間だからな。なかなか来る人なんかいないよな」

まっ昼間にこんなところに来るなんてよっぱどの暇人か、始業式归りの・・・

「カ、カップルばかりだね・・・／＼／」

「お、おう・・・／＼。こんなところに来るんだな」

「本宮に行こうか」

「う、うん・・・／＼」

2人で周りのカップルを気にしながら、一気に駆け抜けていった

本宮に到着

「はあ、はあ、結構遠かったな」

「思わず走っちゃったね」

「じゃあお参りするか」

「うん」

チャリン、パン、パン

「・・・」

「何お願いしたの？」

「甲子園にいきますように、かな。アカネは？」

「インターハイいきますようにでしょ、あと・・・」

「あと？」

「あつ・・・、内緒／／」

「なんだよ、気になるだろ」

「内緒ったら、内緒」

「わかったよ、深入りはしねえよ」

「いつか言うからね。（その時が来たらね。私の目標が達成できたその時に）」

「まあ、楽しみにしてるよ」

「うん！」

アカネの顔は真っ赤になっていたが、あえて口には出さなかった

現在 14 : 30

場所は休憩所

アカネとお茶をすすりながら、和菓子を食べている

「このあとどうしようか？」

「うーんとね、あつ、ちょっと待っててね」

アカネは駆け足で授与品売り場に行った。何か買ったようだ

「お待たせ」

「何買ったんだ？」

「うーん。エリの所に戻ったら渡すから」

「そうか。楽しみにしとくよ」

現在 15 : 10

「和菓子も食べ終わったし、どうしよっか？」

「うーん、そろそろエリの仏像モードも切れるしな」

「その通りでエリのお土産でも買って行ってあげよっか」

「そのアイスとかどうだ？この前テレビでやってたところ」

「いいかも。はやく買ってってあげようよ」

「おう。あつ、すみません、これ3つで」

『ありがとうございます。900円になります』

「ありがとうございます。これアカネの「スッ

「ありがとう。はやくエリのとこ行ってあげよ

「そうだな」

俺とアカネはエリのいる大仏のところまで歩き出した

「今度はふたりきりで・・・」ボソッ

アカネの言ったことは聞こえなかったが、なんとなくはわかっていた

八・幡・宮！！（後書き）

修紀「うゝん。ありきたり」

大台「難しいや、てか途中からエリに申し訳なくなつた」

修紀「たしかにひどいな」

大台「次回から学校に戻ります」

大台「そついえば10月30日の桜高文化祭に行った人っていますか？」

修紀「大台は3時間かけて車で行きました」

大台「死ぬかと思つた」

修紀「あほだ。次回よろしく」

部活！！（前書き）

大台「やっとメインにいけるよ」

修紀「学校初日に部活なかったもんね」

大台「前の方が公式戦で休養日って設定だったから」

修紀「普通は練習あるけどね」

大台「まあいいじゃん。それでは『部活！！』です」

部活！！

「……待ってないでラインに立って、顔をあげて這い上がれ」

ピッ

現在 5：15

場所は自室のベット

携帯から流れるアラームの何年か前の甲子園テーマ曲をとめて伸びをする

昨日は鎌倉から帰ってこれたのは18時だった

薄暗かったので、エリとアカネを家に送り届け、自宅に着いたのが
19時

かなり疲れていたので21時には眠ってしまっていた

今日から朝練が再スタート

7時からなので6時には家をでないといけない

ちなみにバレー部も今日から朝練らしい

ベットからおきてリビングに降りると

「修紀、弁当できてるわよ。ごはん早くたべちゃいなさい。アカネちゃんきちゃうよ」

「わかった。先に顔洗ってくる」

母さんはいつも俺より先に起きて朝食と弁当を作ってくれている。ほんとに感謝だ

顔を洗って朝食を食べていると母さんが

「今度の試合エリちゃんとアカネちゃん観に来るの？」

「来るって言ってた」

「そう・・・、じゃあまた母さんの車で乗っけてくわね」

「アカネのおばちゃんに言っといてよ、じゃあもう行くから」

「わかった。行ってらっしゃい」

「行ってきます」

現在 5 : 5 5

場所は自宅の前

実はアカネの家は隣

自宅の前ということはアカネの家のまえでもあるということだ

ピンポーン

アカネの家のインターホンを押す

「待つてゝすぐ行く」

アカネの声が聞こえた。もう玄関にいるらしい

ガチャッ

「待たしてごめんね」

アカネが勢いよく扉を開けて家から出てきた

「かまわねえよ。さつさとエリ迎えに行くぞ」

「うん、急ご」

アカネと自転車でエリの家へとむかう

「そういえば、今度の試合うちの親が乗っけてってくれるって」

「いつもごめんね。おじさんとおばさんによろしく言っというて」

「わかった。たぶんお前のおばちゃんにも伝えてると思うから」

「うん。絶対勝つてよ、応援に行つたげるんだから」

「うーん、厳しいかな。相手は関東No.1だし」

「そんな弱気でどうするの。楽しんだらいいのよ」

「・・・そうだな、頑張つて楽しんでくるよ」

そんな会話をしながら自転車をこいでいくともうエリの家が見えてきた

家の前でエリが自転車を用意して立っていた

「めずらしいな、エリが外に出てきてるなんて」

「エリどうしたの？きょうはやけに早いね」

エリはいつもぎりぎりになって出てくるのだ。それなのに今日はすでにでてきている。

そのことに対してアカネと2人で驚いているとエリは

「今日は目覚まし時計でちゃんと起きれました！！」

「自慢されても・・・」

「いや、それが普通だから」

アカネと若干ドヤ顔で言うと

「少しは褒めてよ！！」

「ひさしびりにのんびりいけるね」

「いつもこうだといいのにな」

「無視ですか（怒）！！」

こんな感じでエリをからかいながら学校へとむかった
エリはかなり怒っていた

現在 6 : 5 0

桜高校門前

ようやく学校に着いた

いつもならここでエリとアカネは体育館へ、俺はグラウンドへ分かれる

だが今日は

「なんでお前らこっちくるんだ？」

俺と同じ方向にくるのでエリに聞くと

「今日は体育館使えないからグラウンドだって」

「グラウンドでなにすんの？」

「走るぐらいしかできないかな」

アカネが苦笑いで答える

「俺らフリーバッティングするから打球気をつけとけよ」

「「わかった」」

カキーン！カキーン！

「あいかわらずよくとばすね」

「ほんとね」

「っていうか・・・」

ボカーン！！

『こらー河野！ー！』

「すみません！」

「・・・とびつすれ」

「校舎直撃・・・」

『瀧ー！佐藤！しゃべりながら走るな！！』

「「！！！すいません！！！」」

現在7：45

修紀視点

カキーン！カキーン！

「ラストお願いします！！」

『ボール行きまーす！』

カキーン！

『ナイバッチー！』

「ありがとうございました！！」

「ふー、うん、いい感じ」

『よく飛んでたな、週末も期待できるな』

「あ、監督。ありがとうございます」

ざわざわ

『ん、なんだかセンターの奥がさわがしいな』

「どうしたんですかね・・・」

『河野ー！！大変だあー！！』

「どうしたんだ中島？」

『さっきの打球で・・・』

「・・・！！！」

エリ視点

『1・2、1・2、ラスト』

「やっと終わりだね」

「きょうのはとくにきつかったね」

今日の朝練はとくにしんどかった。そんなことをアカネと話していた

「アカネ、水飲みに行こうよ」

「うん、顔も洗いたいしね」

そのときだった。アカネもわたしも疲れでボーっとしていたんだろう

カキーン!!

『あぶない!?!』

「「えっ」」

ドカツ

硬球がアカネの頭を直撃した

アカネはそのまま倒れてしまった

「アカネー！！！！！！」

アカネの意識はなかった

部活！！その2（前書き）

アカネ事故後の話です

部活！！その2

現在9：50

場所は桜ヶ丘総合病院

『先生、精密検査の結果は・・・』

『大丈夫ですよ。目立った外傷ありませんし、脳も無事でした。意識もすぐに戻ると思います』

『そうですか、よかった』

『あとは本人の意識がもどったら、もういちど検査をしますので』
『ありがとうございます』

ガラガラ

「先生、アカネは・・・」

『大丈夫だよ、今のところはどうもないって』

「そうですか」

先生が診察室から出てきてエリと会話している

俺はまだ頭の中が混乱していた

「修紀、エリ大丈夫だった」

『まだ安静で、少し入院しなくちゃならんけどな』

「そうですか・・・」

「しゃきつとしろ!!」

「お、おう」

「アカネが起きたときにそんな顔してたらぶつよ」

「ぶつって・・・。わかったよ」

「わかればよろしい」

『じゃあ俺は学校に連絡してくるから、お前らは佐藤の病室に行つてろ』

「「はい」」

「行こっか」

「おう」

俺とエリはアカネの病室へとむかった

- - - - -

朝練のおわりかけ、そのときに悲劇がおきた

俺の打球が、センターの奥で練習していたアカネに直撃した

俺は自分で見ていないが、守備をしていた中島がすごい勢いで走ってきたのすぐにアカネのもとへとむかった

アカネのところには人だかりができていて、その中にアカネが倒れていた

エリがアカネのそばに着いていたが、泣いていた

そこから頭の中が真っ白になりあまり覚えていない・・・

山中先生が気を使ってくれて、俺とエリを公認欠席という形で病院

に送り出してくれたらしい

- - - - -

今、アカネの病室の入り口にいる

「いい？アカネが起きてたら暗い顔は絶対しないこと」

「わかってるよ」

「よし、じゃあ開けるよ。アカネゝ入るよ」

《うん、どうぞ》

「あ、起きてるね。ほら修紀、入るよ」

「おう」

ガラガラ

「アカネ、大丈夫」

「うん、心配かけてごめんね」

アカネの頭には包帯が巻かれている

「ごめんな、アカネ。その・・・」

「うん、ぜんぜん大丈夫だよ。だから気にしないで」

「うん・・・」

どついう言葉をかければいいのか分からず詰まってしまった

しばらくの沈黙の後、エリが

「あ、わたし和に連絡してくるね。頼まれてたの忘れてた」

と言って病室を出て行った

「えーと・・・」

言葉に迷っていると

「そうだ！」

といきなり声をあげた

「な、なんだいきなり」

「このお詫びとして、修紀くんからもらいたいものがあるの」

アカネがえへへと笑いながら言ってきた

「んで、なにがほしいんだ？」

と聞くとアカネが少し間をおいて

「ええとね、今週末の試合のホームランボール」

「え？」

「だから、ホームランボール。こんだけ一緒にいるのにまだひとつももらってないんだよね」

「言われてみれば・・・」

「私ね、実は中学も野球やりたかったの」

「・・・」

「でも高校野球って女子は出れないでしょ。だから中学でエリと一緒にきりよくあきらめようって」

「それで中学からバレー部に入っただのか」

「うん。でも甲子園はまだ懂れてる。だからね、エリと一緒に決めたの」

「？、なにを？」

「修紀くんが甲子園に行くのを信じようって、つれてってもらおうって」

「そんなことを言ってたのか・・・」

「うん。だからね、今度のホームランボールはその約束の第一歩・・・」

」

「・・・よし！わかった。ホームランボール約束する。そしてお前もエリも甲子園に連れて行く」

「ふふ、よろしくね」

ガラガラ

「修紀、どうする？部活行く？」

エリがドアを開けて入ってきた

「もちろん。キャプテンが練習サボれないからな」

「わかった。じゃあ先生に連絡してくるね。」

「ああ」

「？なんかすつきりした顔してるね？」

エリが意地悪そうに聞いてくる

「ん、ちよつとな」

「ふゝん（アカネあのこと言っただね）」

「じゃあ帰るか、アカネまた来るから」

「うん」

「じゃあまたね、アカネ」

「また明日ね」

病院を出て、先生が車を回してくるのを待っている

「さあて、今から部活頑張るか」

「結局丸1日授業休んじゃったね」

「まあ、ノートなら佐伯が真鍋にでもみせてもらえばいいだろ」

「そうだね・・・、あつ先生きた」

「先生お願いします」

先生の車に乗り込もうとしたときにエリが俺の肩に手を置いて

「頑張つてホームラン打たないとね」

と微笑んで言ってきた

「おう！もちろんだ」

俺もはっきりと答えた

現在 14:00

朝のような俺の心の暗さはエリとアカネのおかげですっかりなくなっていた

部活！！その2（後書き）

大台「あゝ、緊張した」

修紀「お前は俺を殺人犯にしたかったのか！？」

大台「あんまりうまくまとまらなかった」

修紀「話を聞けー！！」

大台「次は修紀の試合です」

修紀「もういいや。お楽しみに」

約束！！（前書き）

大台「いよいよ公式戦です」

修紀「あゝ緊張してきた」

大台「アカネとの約束は果たして達成できるのでしょうか」

修紀「頑張ります」

大台「それではどうぞ」

約束！！

現在10:00

場所は桜ヶ丘高校体育館

バシーン！！

『アカネーナイスアタック！』

アカネが強烈なアタックをきめた。

『よし、10分休憩だ』

顧問が指示を出し、休憩に入ると

「完全復活だね、副キャプテン」

エリが横から寄ってきてニカッと笑って言った

今日は土曜日。バレー部は午前中練習の日

アカネはおとといに無事退院。頭の包帯もとれて、部活にも復帰した
まだ少しあざが残ってしまっている

「うーん、あざ残っちゃってるね」

アカネが心配そうに聞いてきたが、アカネはニツと笑い

「別に気にしてないよ」

と答えた

「それより今日は練習１２時半までよね？」

アカネはあざのことよりも修紀の試合の方がきになるようだ

「うん、１３時に修紀のおばちゃんが車で迎えに来てくれるって」

今日は修紀の試合の日、アカネとの約束の日でもある

野球部は早朝に軽く練習し、すでに会場入りしている

『おい、瀧ー！メニュー言うからこっち来い』

顧問の先生がエリを呼んだ

「はい！すぐいきます。ごめんね、ちょっと行ってくる」

「うん」

エリはすぐに返事をして先生のもとにむかった

アカネはふと時計を見た。 １０：３０

試合開始まであと３時間

（あと3時間かあ。待ち遠しいなあ。ほんとに打ってくれるかな・・
・）

そんなことを思っているとエリがこっちに戻ってきた

「エリ、先生なんて？」

「実戦練習やるって、そのあと筋トレでおわり」

「わかった。よし、集中して早くおわらせよっか」

「早く球場に行きたいしね」

『休憩終わりだ！チーム分けするぞ』

「「はい！」」

エリとアカネは集合しに走っていった

――

――
――

現在 11:55

場所 市立桜ヶ丘球場

桜高野球部はスタンドで試合を観ていた

修紀は監督の横に座って次の対戦相手になるチームを観ていた

『2回終わって6-0か・・・』

監督が横でばやいている

「コールドになるかもしれませんね。3回表がおわったらアップにいきます」

『ん。わかった』

「衣笠！アップこの回おわったらいくから。俺はブルペンいくから頼む」

『おう、わかった』

「藤井、調整しとけよ」

『もちろん』

俺は副キャプテンの衣笠に野手のアップを頼み、先発の藤井に声を

かけた

（ちょっと開始がはやまるかもな。あいつら間に合うかな・・・）

そんなことを考えていると、3回表がおわった。

「おし！アップ行くぞ！！」

『『うっし！！！！』』

全員に声をかけて俺は気合を入れなおした

――
――
――

現在 12：10

場所 体育館入り口前

思ったよりも早く練習がおわり、片付けも済んで先生の周りに集合している

『明日は9時から練習だ。今日とおなじ感じのメニューになると思う。それでは解散』

『『ありがとうございます』』

練習がおわるとみんなこのあとどうするかなどで話し合っている

「思ったより早く終わったね」

「うん。あ、おばさんからメールきてる・・・前の試合がコールドではやく終わりそうなんだって」

「そっか、じゃあ早く着替えよう！」

エリとアカネが話していると、三花が寄ってきた

「エリ、アカネ！このあと駅前なたこ焼き食べに行くんだけど一緒に行かない？」

「あ、三花。ごめんね、このあと野球部の試合観に行くの」

アカネが申し訳なさそうに答える

「そっかぁ・・・、しかたないね。でもほんとにアカネは河野くん好きだよー。クラスでも噂だし」

「えっ!?!」

三花がからかうように言うと、アカネは顔を真っ赤にして驚きの声

をあげた

するとエリも便乗して

「そうだよ、私アカネから相談つけたもん。ね、アカネ」

からかうように言うとアカネは

「うゝエリゝ／＼／＼っ／＼／」ボンッ バタッ

アカネはあまりのはずかしさに頭から煙がふいてそのまま倒れてしまった

「「ア、アカネゝ!?」」

エリと三花は急いでアカネに駆け寄った

「あゝあ、やりすぎだよエリ」

「三花もね。同罪だよ。それよりアカネどうしよう、もうすぐおばちゃんくるのに」

もうすぐ12時半で修紀の母親がくる。それまでにアカネを起こさなければならなくなり

「水かけよっか」

「いくらなんでもそれはだめ」

エリが真顔で言うが、三花が呆れ顔で促す

そんなこんなしていると

「うん・・・私はいったい・・・」

アカネが勝手に起き上がったが

「おぼえてないの!?!」

「まったく・・・」

「・・・・・・・・」

いじられて気絶したのをアカネは忘れてしまっていたのにエリと三花は驚いた

そんなことも知らず、アカネは携帯を開く

「エリ、おばさんもう校門前に来てるって」

「わかった。ごめんね三花。また今度行こ」

「うん。応援頑張って」

「また明日」

「またね」

三花に別れを告げて、エリとアカネは校門にむかった

ガチャ

「おばさん。すいませんお待たせして」

「お願いします」

アカネとエリが息を切らしながら言う

『はいはい、早く乗って、前の試合コールドみたいだから予定より早く始まりそうなの』

「「お願いします」」

そう言ってエリとアカネは修紀母の車に乗り込んで球場にむかった

――
――
――

スバーン

室内ブルペンにミットの音が鳴り響く

「ナイスボー」

今は試合前で投球練習をしている

スバーン

先発である藤井の球を受けている

『なあ、河野』

「ん？」

『今日瀧ちゃん来るの？』

「来るよ」

いきなりなにを言い出すかと思えば・・・そういえばこいつエリを狙ってるんだっけ・・・

「そんなこと気にしているとまたKOくらっぞ」

前回1回戦はこいつが3回でKOされて途中から俺が登板してなんとか勝った

『うるせーよ！瀧ちゃんの前でかつこ悪いことできるかよ』

「今回は相手が違うからな。集中してねえとすぐに降ろすぞ」

『わかってるよ！まかしとけて！』

不安だ・・・

（まあ俺もひとのこと言えねえけどな・・・）

今日はアカネとの約束の日。なんとか果たさなければ・・・

ブロロロロ

『もうすぐ着くからね。もう試合始まつてるかもしれないね』

エリとアカネは修紀の母車で球場にむかっている

アカネはずっとそわそわしていて、エリはそれを笑顔でみている

「気になる？アカネ」

「えっ！？な、なにが？」

アカネはずっと考え事をしていたらしく、いきなり声をかけられて焦っている

するとエリは悪い笑顔で

「何考えてたのさ。修紀のことかな」

「ちょ、ちょっとエリ！！おばさんもいるのに／＼」

『え、なににエリちゃん。アカネちゃんがどうしたの？』

エリがからかっていると、修紀母も興味深深に聞いてくる

「実はですね、アカネって」

『うんうん』

「わー！！エリストップ！言わないで／＼／」

「『あはははは』」

そんなこんなでアカネをからかっていると球場に着いた

球場の駐車場に車を止めて、車から降りると球場のアナウンスが聞こえてきた

『2回の裏、桜ヶ丘高校の攻撃は、4番キャッチャー河野君』

「アカネ、急ごー！修紀の打席おわっちゃう」

「うん！」

エリとアカネは桜高側の一塁側スタンドに入った。ちょうどそのとき

カキーン！！

「あつ打った！」

「右中間抜けたー！スリーベースかも」

修紀が三塁に滑り込んでセーフになると歓声があがった

「やったー」

エリとアカネは跳び上がってよろこんだ

このあとスクイズで桜高が先制した

「先制したはいいけど・・・」

「ずっとピンチだね」

エリとアカネが不安そうにマウンドをみつめている

現在4回表、ツーアウトながら満塁。しかもバッターは4番

初回から藤井はまったくピリっとしていない

見方のファインプレーや相手のミスでなんとかしのいできたのだが・
・

今は内野がマウンドに集まっている。藤井を見ると肩で息をしている

すると、伝令が走ってきた

「監督はなんて？」

俺が伝令に聞くと、

『藤井さんの意思を尊重しろと言ってます』

「そうか・・・、どうだ藤井、まだいけるか？」

『当たり前のこと聞くなよ。まだ投げれる』

藤井は苦しそうにしながら答えた

「わかった。全力でこいよ！」

『うしー！』

監督の指示どおり、藤井の意思を尊重した。おそらく藤井はこの回まで

ここは全力できてほしい

藤井がセットポジションから投げた

――――

――――

――

8回裏ツーアウト

現在 2 - 1

桜高 1 点のビハインド

さきほどの藤井の球は藤井のグラブをかすめてセンターに抜け、結

局2点タイムリーとなった

そのあとは俺がマウンドにあがり、なんとか抑えることができた

『3番ショート山岡君』

俺は今ネクストサークルにいる

正直この回に追いつかないと厳しい

山岡になんとしてでも塁に出てほしい

カーン！

打球がセカンドの後ろに上がった

（おちろ！おちろ！！）

ポテン

「よっしゃー！」

ふらふらと上がったフライがちょうどセカンドとライトの間に落ちてヒットになった

ツーアウトランナー一塁

一発であれば逆転のチャンス

「修紀くん打ってくれるかな・・・」

「大丈夫、必ず打ってくれるよ」

アカネの緊張は最高潮だ。エリはアカネの手を握って気持ちを落ち着かせようとしている

「大丈夫、大丈夫・・・」

かといって、エリもアカネとおなじくらい緊張しているようだ

ピッチャーがセットポジションに入る

グラウンドには今日一番の桜高の応援が響き渡る

アカネとエリの緊張も最大になっている

ピッチャー第1球を・・・

投げた！！

カキン！！

――
――
――

現在 16 : 00

場所は桜ヶ丘球場駐車場

「はい、アカネ。約束のやつ」

「あ、ありがとう修紀くん／／／」

「よかったね、アカネ」

「うん／／／」

結局試合は3 - 2で逆転勝利

あのととき打ったあたりはレフトのポールに直撃し、ツーランホームランになった

球場にはこの試合で一番のどよめきがあがった

それを観ていたエリとアカネは大喜びで跳び上がった

そのあとは修紀のあとをリリーフした2年生ピッチャーが3人でしめ、関東No.1校から見事勝利をあげた

修紀は試合後審判に呼ばれて、ホームランボールを手渡された

ボールにはボールの黄色いペンキがついていた

それをズボンのポケットに入れてミーティングにむかった

20分ほどのミーティングを終えると、現地解散となった

明日も試合だが、午後からなので明日は朝練習してから球場入りするとのことだった

桜ヶ丘球場は桜高から自転車で15分ほどのところなので、現地解散になることが多い

修紀はそのあと、待っていてくれたアカネとエリのところにむかって、アカネにボールを手渡したのだ

「母さん仕事で帰っちゃたしな・・・このあとどうする？」

「うん。自転車取りに学校に戻らないと・・・エリ？」

エリは公園のほうをむいてじーっとみつめている

「ごめん、先に帰ってて。わたしちょっと寄るところがあるから」

「？、わかった。あんまり遅くなんなよ」

「うん、またねー」

エリは公園のほうに走っていった

「どうしたんだろうね？」

「さあ、さっぱりだな」

エリがどこかに行ってしまった

まあ行ってしまったものは仕方ないので、

「俺たちは帰るか、学校に戻るんだろ」

「うん、行こっか」

修紀とアカネは夕暮れの道をふたりで歩いていった

――
――
――

アカネ宅

アカネは自室のベッドの上で今日もらったボールをみている

「えへへ／＼／」

ボールには修紀がマジックで

【アカネへ 2010・4・16 対帝王学園 桜ヶ丘球場】
と書いてある

アカネはほんとに打ってくれると信じていた

そのぶん打った時の喜びはほんとうに大きかった

「修紀くんやつぱりすごいなあ。スカウトくるぐらいだもんね。試合の後もインタビュー受けてたし」

（プロとかになるのかなあ。そしたら凄く遠いひとなっちゃうなあ）

アカネは少しさびしげな表情をしながらボールをグッと強く握った

（早く目標達成して、気持ち伝えなきゃ）

そんなことを思いながらアカネは眠りについた

約束！！（後書き）

大台「やっと終わった」

修紀「なんか締まらないよな」

大台「スポーツを文章にするのは大変なんだよ」

修紀「初挑戦だもんな」

大台「次回修学旅行にしようか迷ってます」

修紀「それでは」

修学旅行！！その1（前書き）

大台「時間かったよ。3回書き直した」

修紀「遅い！中身も中途半端」

大台「旅行もんって難しい」

修紀「文才がねえからだろ」

大台「うるせい！」

修紀「それではどうぞ」

修学旅行！！その1

現在14:20

場所は桜ヶ丘高校3年2組教室

6限目のHRの時間

野球部の春の県大会が終わってちょうど2週間が経った

結局準決勝で敗退。ベスト4という結果だった。俺は打率4割、2
ホーマーとなかなかの成績を残した

で、この時間は何をするかというと・・・

「では班のメンバーを決めてください。4人で1組となるようにしてくださいね」

山中先生が説明を終え、生徒に班決めをするように促す

そう、この時間は2週間後に控えた京都修学旅行の説明といろいろ決めるためのものだ

そして、今は班決めのためにみんな自由に動き回っている

俺はどうしようか悩んでいると、エリとアカネ、三花が俺の机のと

こまできた

「ん？どうした？」

俺が聞くと、エリが

「あんね、バレエ部だけだと3人なの。だから修紀入んない？」

と聞いてきた

しかしさつきから後ろからのよくわからん殺気みたいなのが飛んで来るんだが・・・

おそろおそろ後ろをむくと、このクラスの残りの男子であるA君とB君がこちらを見ていた

ふたりは映像研究部であるので、俺はまったくからんだこともないが、一応

「あのふたりの視線がさつきから痛いんだが」

と聞いてみると

「あー、気にしない気にしない」

「あんなのほっとこ」

「あつかいひどいね」

エリと三花、今お前ら凄いこと言ったぞ。アカネも苦笑いだし

後ろをちらつと見るとふたりは呆然としていた。そろそつだ、お前らの扱いなんてそんなもんだ

「じゃあ、自由行動の予定立てるよ」

アカネが地図としおりを取り出す

2日目は自由行動なので、いきいたいところを決めなければならない

「どこに行きたいとこあんのか？」

「錦市場」「嵐山」「平等院鳳凰堂」

鳳凰堂つてとこだけちゃんと聞こえた。あとはかぶってわからん

「えーつとな、錦市場と嵐山はわりと近いけど、平等院は・・・滋賀か？これ」

ちなみに、錦市場は三花、嵐山はアカネ、平等院はエリだ

平等院よりも、その中の仏像に興味があるんだろうけど

「ちょっと、遠いね」

「電車じゃ時間がかかるかも」

アカネと三花も思案顔になる

するとエリが

「えゝ行こうよ行こうよ！鳳凰堂だよ！10円玉だよ！」

だだをごねだした

やかましい・・・

3人で悩んでいると、俺に1つの案がうかんだ

「よし、できるかどうかはわからんけど、俺がなんとかするよ」

「え？」

「大丈夫なの？」

アカネと三花はきよとなとなる

「うまくいくかどうかはわからんけどな」

そんなこんなで予定を決めていった

――
――
――

現在 10:10

場所は新幹線の車内

桜ヶ丘高校3年生一行は京都へと新幹線で移動中

車両が桜高の生徒で貸切状態となっている。なので、かなり騒がしい

俺の横にアカネ、前にはエリと三花が座っている

「修紀よく予定立てれたね」

エリが上機嫌で言ってくるが

「ほんとに大丈夫なの？迷惑じゃない？」

アカネはちよつと不安そうだ

今言ってるのは明日の自由行動のことだ

エリの平等院の件をなんとか解決した。まあ、この説明は明日でいいか

「大丈夫だよ。むこうも大丈夫って言ってたし」

そんな会話をしていると、突然怒鳴り声が聞こえた

「こら！そこ！用もないのに席を立たないの！！」

山中先生が誰かに注意している。その視線の先には

秋山がカメラを持って通路に立っていた。秋山は「ヒイツ」ってなっている

すると田井中が

「零が写真撮るって聞きましたっん」

「ええー！」

田井中のびっくり発言に秋山が驚く

でも、クラス全員は『田井中が原因』と理解していた

「なに言ってるの！すぐ席に戻りなさい」

山中先生の注意に対して、田井中はめげずに

「先生も撮ろ！」

「はやく来てっ！」

と言い出した。平沢ものっている

「行くわけないでしょ！まったくあなたたちは・・・」

と言いつつも

パシヤッ

先生は写真を撮った後凄いスピードで車両を出て行った

「だめ教師丸出しだな」

「そこまで言うことないでしょ」

俺の発言にアカネが苦笑いになった

「あ！富士山だ」

エリが突然声を上げる。窓の外を見ると富士山がでかかと現れていた

「でっけえな」

「きれいだね」

初めてみる富士山にみんな圧倒されていた

――
――
――

現在 12:10

京都駅到着

生徒がぞろぞろと新幹線から降りてくる
これからバスに乗り換えて鹿苑寺へとむかう

そのために生徒が次々とバスにのっていくが、山中先生が乗っていない

何事かと窓から外を見ると、山中先生が怒鳴っている。その先には・・・

・・・軽音部・・・

ほんとにやりたい放題だな。ある意味問題児だ

バスは鹿苑寺に到着した

「ここには何があるんだっけ？」

エリが興味津々に聞いてくる。っていうか知らないのか

「ここはね、あの金閣寺があるの」
アカネがエリに説明する

「あの金ぴかの!？」

エリの目が輝きだす

「行くよ!三花!！」

「うん!」

エリと三花は凄いスピードで走っていつてしまった

「子供か・・・」

「まあいいんじゃない。楽しそうだし」

「はあ」

思わずため息が出る

そういえば、軽音部の連中も走っていったな

「真鍋」

「なに？」

近くにいた真鍋に声をかける

「軽音部っていつもあんななのか？ってか何してんだ？」

「何してるって・・・、練習は・・・してないわね」

真鍋は苦笑いで、返答に困っているようだ

「俺の目にはちょっとした問題グループに見えるけど？」

俺が思っていることをストレートに言ってみると

「それは、唯と律だけよ。あとたまにムギも。澪は真面目だし」

「権力をおふざけ側が持つてゐることか」

「そういうことね」

真鍋は「はあ」とため息をついた

真鍋も苦勞してんだな

エリと三花を追いかけていくと、目の前に金閣寺が現れた

「わゝ、ほんとにピカピカだ」

アカネが感動の声をあげる

「生で見るとこれまたすげえな」

俺も金閣寺に圧倒され、思わず声に出してしまった

「それで、エリと三花はどこに・・・」

「いないね・・・」

あたりを見渡してみると・・・

・・・いた

休憩所みたいなのこの椅子に座って何か飲んでいる

「何飲んでんだ」

「勝手に飲んでいいの？」

俺とアカネが呆れ気味に聞くと

「お抹茶！苦いよ」

エリが二ヒヒという感じで答えた

「ほら、軽音部も飲んでるし！」

三花の指差す方を見ると

「律もたまにはそういう上品な作法も習ってみたらどうだ？」

「そうだよ！っちゃん。卑しいよ、お粗末だよ・・・」

「お前が言っな！」

・・・

「あいつらどこ行ってもお茶だな」

「ほんとにね」

俺とアカネはただ苦笑いだった

でもせつかなので

「俺らも飲むか」

「うん」

抹茶と和菓子を頂いた

修学旅行！！その1（後書き）

大台「今週末は部活の遠征やかなりの課題があるため、更新が遅れます」

修紀「こんな作者ですが、今後もよろしく願います」

修学旅行！！その2（前書き）

大台「遅くなってすいませんでした！！」

修紀「遅い！かかりすぎだ」

大台「なんか萎えてたんだよ」

修紀「理由になるか！」

大台「うるせい！それでは『その2』です」

修学旅行！！その2

現在13：45

場所は金閣寺のそばの休憩所

結局4人で抹茶とお菓子を頂いた。
ちようど飲み終わったところで集合時間が迫っていたので、その場をあとにした。

軽音部はというと・・・

「あゝん、あと1個だけ〜！」

「だめだ！集合時間に遅れたらみんなに迷惑がかかるだろ」

「てか唯、3個も食べてたし・・・」

「唯ちゃん、また部活で持っていくから」

お菓子を食べたらないとダダをこねる平沢を秋山が引きずっていった

秋山が『手伝って』という視線を送ってきたが、『頑張れ』と返しておいた

全員がバスにそろつと、バスは次の目的地へと出発した

移動中の車内

「今からどこ行くんだっけ？」

エリが前の席から聞いてくる

「北野天満宮だよ」

アカネがしおりを見ながら言う

そして三花が

「北野天満宮つてどういうところ？」

つて聞いてきた。知らんのかい・・・

「まあ、学問の神様を祀つてあるところだな。入試前には受験生が
いっぱい来るんだって」

一応事前指導で言われてたことを言っておく。こいつら説明まっただ
く聞いてなかったな・・・

「へ」

興味なさそうだな・・・

バスが目的地に到着した

生徒がそろそろとバスから降りていく

入り口である門をくぐると・・・普通の神社？だな

バンバンバン

「ねーねーこの牛なに？」

エリが牛の石造を叩きながら聞いてくる

「やめとけ、罰あたるぞ」

でも、この牛知らないな。いったい何なのか・・・

「アカネ知ってるか？」

アカネに聞くが

「ううん、わかんない。なんだろう？」

アカネもわからないとなると・・・

あ、あそこに賢いのがいた

「高橋！ちよつといい？」

「え？どうしたの？」

「この牛って何だか知ってる？」

三花が高橋に聞く。ちなみに高橋風子ね

「えっとね、真鍋さんが言ってたんだけど、この牛の頭をなでると頭が良くなるんだって」

さすが高橋。どこかの誰かさんと違ってちゃんと人の話を聞いている

「誰かって誰のことよ！？」

エリが怒りながら言ってきたが

「知らん」

言わんでもわかるだろ

「じゃあ、私は班に戻るね」

「うん。ありがとう風子ちゃん」

アカネがお礼を言うと、高橋は自分の班のところに戻って行った

「んじゃ、なでとくか。受験生だし」

4人で牛の頭をなでる。すると三花が

「エリは多めになでといたほうがいいよ」

悪い笑みでエリに言う

「三花に言われたくないよ」

エリが怒る。まあ、エリも三花も頭が悪いわけではない

アカネが良すぎるので目立たないわけで・・・

アカネの方を見ると、手を牛の頭にのせたまま止まっていた

「アカネ？」

反応がない

「アカネ!!」

「え？」

強めに呼ぶと反応した

「どうしたんだ？ばおつとして」

「え、えーと・・・、ごめん考え事してた」
アカネは笑ってごまかす

「ふーん」
何を考えてたかは別に聞かない

「そ、そうだ、お参り行かない？せっかく来たんだしさ」
アカネが焦ってごまかすように言う。ま、いつか

「そうだな。俺たち受験生だし。願い事しとくか」

そのあとエリと三花を呼んでお参りをした
アカネはえらく長かったが、何をお願いしてたんだろう

今はバスに向かって歩いている
「アカネは何お願いしたの？随分長かったけど」
三花が横からアカネに声をかける

「受験成功しますようにでしょ、インターハイいきますように、あ
と」修紀くと結ばれますように「エリ〜！！」

「きゃーアカネが怒った！」
「待たんかいコラ！！」

ふたりはそのまま走っていつてしまった

「アカネの口調がヤクザに・・・」

「・・・河野くん、さっきの聞いてた？」

「いや、聞こえなかった」

「そつか・・・残念」

何が残念なのかわからんが、とりあえずふたりの後を追いかけた

駐車場に着くと、アカネがエリを追い詰めていた。しかし、その間には・・・

「はあはあ、やっと追い詰めたわよ。覚悟はできてるんでしょうね、エリ？」

目が笑ってねえぞアカネ

「漣、助けて」

なぜか秋山

「ひいひい！？」

めちゃくちゃびびってんな。てか他人を巻き込むなよ・・・

アカネも普段からは想像つかないような表情してるし

他の軽音部もビビッて近づけないのか

「どうする河野君？」

三花、俺になんとかしろと言ってるのと同じだぞ・・・

「はあ、ほんじゃ行ってくるか」

ため息をつきながらエリとアカネのところにむかう。秋山も助けないといけないし

「がんばってね」

三花が棒読みで俺を送り出す。そういえば三花も見るの初めてなんだっけ

$$\begin{array}{c} \neg \\ \hline \text{I} \\ \hline \text{II} \\ \hline \text{III} \\ \hline \text{IV} \end{array}$$

「ひいひいひいひいひいひいひい！！！！」

怪獣映画と言わんばかりの迫力でアカネがふたりに迫っていくふたりは抱き合って腰をぬかしている

このままだと作者が文章で表現できないような惨事が起きかねるので

ポンツ

「そろそろ正気にもどれよ、アカネ」

アカネの頭に手を置く

する

「……へ？　いつたい何が……」

どうやら元に戻ったようだ

昔からアカネは恥ずかしさと怒りが頂点に達すると我を失つて暴走することがあつた

今回は何が原因かわからんが、エリへの怒りが追いかけるうちに最大になったらしい

「裏アカネが出てたぞ」

「・・・へ？・・・ええゝ！！！」

アカネが驚愕の声をあげる

実はこれはアカネが他人に知られたくないことベスト3に入っていることだ

アカネは症状の自覚がないが、昔ウチの親がこれを録画したのをみて、気絶したことがある

そんな重大なことを、クラスほぼ全員（他クラスも含む）に見られたってことは

ボンツ！

バタツ

やっぱり・・・

「ア、アカネー！！」

三花を先頭にして、クラスメイトがアカネに寄ってくる

今は俺が気絶したアカネを抱えている状態だ

「仕方ないか、俺がアカネ運ぶからみんなはそのふたり手伝ってやってよ」

俺の言葉にみんなが後ろを振り向くと、未だに腰を抜かしているふたりが

「うわ〜ん！怖かったよ〜」

「なんで私まで〜（泣）」

エリと秋山が抱き合って泣いていた

みんなで3人を運んでバスに乗り込んだ

アカネを見た山中先生はびっくりしていた

- - - - -

- - - - -

- - -

現在 17:40

バスが宿舎に到着

アカネはバスの中で目を覚ました。そのあと秋山のところに謝りに行
った

バスから降りると、それぞれの部屋へ行きとりあえず自由時間とな
った

ちなみに俺と同じ部屋なのは

「よろしくな。A君とB君」

「って俺らの名前はAとBじゃねえ！」

とAが嘆く

「俺は吉良、こいつは新田だ！」
とBが言う

「へいへい」

「あつ、そろそろ飯の時間か」

「お前興味ないだろ・・・」
またAが嘆く

「新田だ!!」

Bを無視して携帯をみると、

「吉良だつて！」

18:10

「晩飯18時半からだよな。そろそろ着替えて行くか」

「もういいや・・・」

ふたりのため息をスルーして大広間へとむかった

現在18:30
大広間

晩飯は活動班に分かれて食べる。そのため前にはエリと三花、横にはアカネが座っている

アカネは少し気まずそうな顔をしている

「アカネ、まだ気にしてるのか？」

俺が声をかけると、アカネはうつむいたまま

「だって・・・、みんなに見られたし、澪ちゃんに迷惑かけたし・・・」

「秋山の件はエリのせいだと思うけど・・・」

「修紀くんにも迷惑かけて・・・、ほんとにゴメンなさい！」

アカネは涙目になりながら謝罪してくるが

「全然大丈夫だよ。昔からあれは体験してきたし、周りのみんなもなんとも思っていないと思う」

「ほんとに？」

「うん。だから元気だそう。ほら、真鍋の挨拶だ」

大広間の入り口のほうを見ると、真鍋がマイクを持って立っていた

「1日目はどうでしたか？明日は自由行動ですのでしっかり食べて休んでください」

真鍋の挨拶が終わると、いただきますという声でいっせいに食べ始めた

「そうだ修紀、あとで私たちの部屋に来て。明日の打ち合わせするか

ら」

エリが後で部屋に来るように言ってきたが

「女子3人の部屋に男子が行っていいものなのか？」

率直な疑問をぶつけるが

「平気、平気」

エリと三花はそう言うが

「・・・／／」

アカネは黙りこんでいる

なんか行きづらいが、逆らうと怖いので

「わかった。風呂のあと行くから、風呂上がったらメール頂戴」

「了解」

てな感じで夕食を終えた

- - - - -

- - - - -

- - -

現在 21:00

場所は女子部屋のフロアへと続く階段

男子は3階、女子は4階なのだ

エリから

「部屋に来ていいよ」

のメールがきたので、3人の部屋にむかっているのだが、俺はある

恐怖と戦っている

それは

見張りの先生に見つからないかどうか

階段を上がり、フロアに人がいないかどうか確認する

「誰もいないな・・・」

その角を曲がればすぐそこだ

角を曲がると、

「うおっ！」

と声をあげそうになった

そこには山中先生？が。化粧を落としているからか、誰だか最初わからなかった

山中先生がいなくなると、すばやくドアの前に移動し

コンコン

ノックすると

「入っていいよ」

中からエリの声が聞こえてきた

ガラガラ

「ふう」

中に入り、ドアを閉める

「お疲れさま」

「いらつしゃい」

アカネが労いの言葉を、三花が歓迎の言葉をかけてくる

「じゃあ本題にはいつ!？」

俺の横を枕が通り過ぎる

「ふっふっふ、旅行といったらこれだよな」

エリが枕を持ちながら不敵な笑みを浮かべる

「うん!やろう!」

「え」

俺とアカネは反対だったが、エリと三花の勢いに押し切られ、枕投げ合戦が始まった

- - -

- - -

- -

現在 21:30

枕投げ合戦開始から約25分が経過

状況は

エリとアカネが対戦中、俺と三花は疲れて横で座って観ている

「エリ、昼間の分の恨み。今晴らせてもらっわよ」

「覚えてたの!？」

ジリジリ

「いくよ、アカネ」

「覚悟しなさい、エリ」

ふたりが枕を振りかぶった、その瞬間

『はやく寝なさい!!--!』

横から山中先生らしき人の怒鳴り声

横の部屋って・・・

「軽音部」

アカネが答える

やっぱり・・・

おそらく俺らみたいに騒いでて怒られたんだな
こっちに来なかったのはむこうの方がうるさかったからだな

「中止だな」

「『『そうだね』』」

俺の提案に渋々3人も了承する

「ほんじゃ、本題に戻るぞ」

俺がしおりとパンフを取り出して説明に入る

「午前中は嵐山に行つて、そのまま錦市場で昼飯な」

「嵐山には電車で行くんだよね
とエリが聞いてきた

「おう、錦市場も電車な」

「平等院に行くのは、河野君のお姉さんが送つてくれるんだよね」
三花が興味深そうに聞いてくる

「お姉さんってどんな人？」

そつえばエリと三花は会ったことないんだっけ

「彩佳姉ちゃんに久しぶりに会えるね」

「まあいとこだけだな。やさしい人だよ。まあ、会えばわかるよ」

先生に見つかからないかという不安を抱えながらも、明日の計画を
認めていった

結局部屋に戻れたのは深夜2時だった

修学旅行！！その2（後書き）

修紀「ところどころ俺の口調変わってないか？」

大台「仕方ないだろ、書きにくかったんだから」

修紀「文才ねえな」

大台「許せ」

修紀「もういいよ」

大台「次回はもっとはやくできるようにがんばります」

修学旅行！！その3（前書き）

大台「たいへん遅くなり申し訳ありませんでした！！」

修紀「何日経ってんだよ・・・」

大台「年末のためにバイトのシフト入れすぎた・・・」

修紀「年末って時点で結構の人は気づいたかもしれんな」

大台「誰か会えたらいいな」

修紀「それではその3です」

修学旅行！！その3

ピピピピピ

部屋の中に携帯のアラーム音が鳴り響く

現在06:30

アカネSide

「ふわぁあ〜」

眠気をとばすために1回大きく伸びをした
携帯を手に取り、アラームを止める

周りを見ると、エリと三花はまだ夢の中だ

（まだ起こさなくてもいいか）

朝食は7時半からだからまだ余裕がある。どうせ起こしても二度寝するだろうし

「なんか喉渴いたな・・・」

昨日の晩は騒ぎまくって、そのあとそのまま寝ちゃったんだっけ
喉がカラカラ

（たしかロビーに自動販売機あったっけ）

私は財布と携帯を持ってロビーへと下りていった

ロビーに下りて、自販機の前に行くと、

「お、アカネおはよ」

修紀くんがいた

「おはよう。早いね」

「アカネもな。エリと三花は？」

「まだぐっすりよ。起こすのも悪いし」

私は周りを見渡してみるが、誰もいない。修紀くんだけ。というこ
とは、修紀くんとふたりだけ……
修紀くんとふたりきり……／＼／

「？どうしたんだアカネ。真っ赤になって」

「な、なんでもないよー!!」

私は焦って答える。

「そ、それよりも修紀くんはここで何してたの!？」
私完全にパニックになってる……

すると

「あゝ、早く起きすぎてさあ。眠るにも中途半端だし、それで暇つぶしに飲み物でも買おうかと」

修紀君が頭をかきながら答えた。修紀くんも私と同じみたい

「アカネは？」

「私もいつしよだよ。喉カラカラになちやって」

すると、修紀くんはジャージのポケットから財布を取り出して

「アカネどれがいい？」

「えっ？」

私はいきなりのことに驚いてしまった。それってつまり

「奢るよ」

やっぱり・・・

うれしいけどなんか悪いな

「ほんとにいいの？奢ってもらっても」

すると修紀くんは二カツと笑って

「気にしなくていいよ。ほら、何飲む？」

って言うてくれた。それじゃあ遠慮なく

「えゝつと・・・、じゃあバナナオレで」

「相変わらずの牛乳好きだな。背が高くなるのもわかる気がするよ」
修紀くんが取り出し口からパックを取ってわたしてくれた

「ありがとう」

わたしはお礼を言いながら受け取る

「まあ、エリだったら迷わずコーラだろうけどな」

修紀くんは自販機のボタンを押しながら言う。修紀くんは何買ったのかな……。『黒豆紅茶』ってなに？

「そうだよな。朝からでも炭酸飲んでるよね」

わたしも炭酸飲むけど、さすがに朝からは無理。修紀くんはまったく飲まないし。

わたしたちはロビーのソファに座り、一緒に飲み物を飲んでいるとなりどうしだからちよつと緊張する／＼／
なんか話をふらないと・・・

「修紀くんはもう進路決めたの？」
いきなり進路の話って・・・

すると修紀くんは紅茶を飲みながら

「うーん、一応」

「一応って？」

わたしが聞くと修紀くんは立ち上がり缶をゴミ箱に捨ててこっちをむく

「プロ野球」

・・・へ？

「プロ野球って？」

わたしがキョトンとしていて、修紀くんがソファーに戻ってきて

「そのまんま」

「ほんとに？」

「うん」

「really？」

「yes．なぜ英語？」

わたしはまだ頭の中が混乱している。言葉が見当たらない

「あ、一応って言ったのは、最後の夏の結果次第って意味だから」
呆然としているわたしに修紀くんが言ってきた

「春の大会で結果残せて少し自信になったんだ。スカウトさんもけ
っこう見に来てくれたし」

「それで、夢に挑戦してみようかって・・・、アカネとの約束で
もあるし」

「私との約束？・・・あつ」

「思い出したか？」

「うん・・・覚えててくれたんだ」

それはわたしが野球を断念したときのことだ

「甲子園とプロ、絶対叶えるからな」

修紀くんはわたしにむかって力強く言ってくれた

「ありがとう／＼／」

その時の私の顔は真っ赤だったと思う

バナナオレ飲み終わって、私たちは一緒に階段を上がっている

「そういえば、今日は彩佳姉ちゃんが来てくれるんだよね」

「うん、８時半に駅に来てもらうように言ってる」

修紀くんは携帯でメールを確認しながら言う

階段を上がり終わり、男子のフロアに着く

「そんじゃあまた朝飯でな」

「うん、またあとで」

そついいながら修紀くんと別れた

修紀Side

アカネと別れたあと、俺は部屋へと戻った

部屋のドアを開けると、まだ爆睡してるふたりがいる

「おい、そろそろ起きろよ。飯に間に合わないぞ」と起こそうとするが

『あと1じかんだけ』
『・・・・・・・・』

あと1時間で・・・、片方は無視だし

「おい起きろつて!」

『だからまだいいって』
『・・・・・・・・』

「はあ」

このあとこのやり取りを3回したが、まったく同じだったので放置することにした

俺は制服に着替えて1階へと降りていった

朝食をとったあと、班ごとに並んで山中先生の説明を受けているが、後ろのほうから

『なんで起こさなかったんだよ!!』

『おかげで先生に怒られたじゃないか!!』

という罵声がとんでくるが無視。3回ぐらい起こしたぞ

『そこ!うるさい!!』

山中先生の注意がとんでくる

『すいません・・・』

アホだ・・・

「・・・そしたら大安売りしてて」

「だからあんなにお菓子が入っていたのか」

平沢と田井中が列を無視してどっかに行こうとしている

フルフルフル

あ、山中先生が切れそうだ

「そこ！！列に戻りなさい！！」

「ひいつ！！」

問題児かお前ら・・・

現在09:00

場所は変わって駅前

ここでいとこの姉さんと待ち合わせしているのだが・・・

「来ないね」

エリが呟く

「まあ時間にルーズな人だから・・・」

俺がため息混じりに答えていると

ブーーン

キキーーーーッ

「「あ、来た」」

「「へ？」」

俺とアカネが言つと、エリと三花はキョトンとした

その車は真っ白なハマーだった

修学旅行!!その3(後書き)

大台「アカネ、修紀の過去編は修学旅行が終わってからやります」

修紀「いつになることやら・・・」

修学旅行！！その4（前書き）

大台「1ヶ月ぶりです。あけましておめでとうございます」

修紀「遅い！1月も半分たってるし」

大台「すいません・・・レポートにコミケ、親戚宅回りと忙しくて・・・」

修紀「この小説忘れられてるんじゃないか」

大台「それだけはお勘弁を」

修紀「それではどうぞ」

修学旅行！！その4

現在09:05

駅前のターミナル

修紀SIDE

目の前には場違いなでっかいダンプカーみたいな外車が

ガチャ

そして車の扉が開き、女の人飛び出てきて俺にむかってリアアツトを

・・・って、え？

「おひさー！！しゅーきー！！！！」

「ぐほっ！？」

ドサッ

リアアツトが見事にヒットし、俺はそのまま後ろに倒れる

「久しぶりねえ。元気にしてた？」

その女性はしてやったりな顔をして俺に言ってきた。こういう性格だということを忘れてた・・・

「ゴホッゴホッ、くそ油断した」

俺は咳き込みながらなんとか起き上がる
頭がとんでいくかと思った

「大丈夫？修紀くん」

アカネが駆け寄ってきてくれた。

「ああ、なんとかね」

俺はよろめきながらなんとか痛みに耐えている

「あ！もしかしてアカネちゃん？」

女性アカネをみて指差して言った

「ごぶさたです、彩佳姉ちゃん」

アカネは頭を少しさげて挨拶した

「なんか大人っぽくなっちゃって」

「そんなことないですよ」

アカネとその女は俺をほったらかしで話し出した

エリと三花を見ると果然としていたので

「あ、これが俺の従姉の彩佳姉さん」

と一応説明しておいた

「なんか、外見と中身があってない人だね・・・」

「うん・・・」

三花とエリは困惑してしまっている

三花が言うように姉さんの外見はかなりおしとやかそうな美人さん
なのだ

ストレートの黒髪が肩ぐらいいまで伸びていて、大きな瞳が特徴

しかし、性格に難があって、完全な体育会系でかなりやかましい
バレエを小さいころからやっていて、それで大学に入った
アカネにバレエを仕込んだのも姉さんだ

まあ、このままここで話していても仕方ないので

「姉さん、悪いけどさっそく頼むよ」
アカネとしゃべっていた姉さんに言う

すると、姉さんは俺の方をみて

「そうね、ほんじゃ乗ってちょうだい」

姉さんは車の鍵をあけて、運転席に乗り込んだ

「『おねがいします』」

それに続いて俺たちも乗り込んだ

助手席には俺が、女子3人は後ろの席に乗った

ブロロロ

車は平等院鳳凰堂にむけて移動中
簡単にエリと三花紹介も終えたあと、運転中の姉さんが話をふって
きた

「そついえば修紀さ、彼女いんの？」

うつ、いきなりきつい話題を・・・

「・・・・・・・・いないです」

「やつぱりね、まだアカネちゃんを射止めてなかったか」

「いきなり何？！ってか後ろに聞こえるって」

俺はびっくりして読んでいたガイドブックを落としそうになった

「大丈夫よ。この車うるさいし、3人ともおしゃべりしてるし」
確かに後ろの3人はしおりを見ながら話し込んでいる

「あんたもそろそろ彼女作つとかないと、いつまでも年齢〃彼女いない歴じゃだめよ」
くそ、自分は彼氏いるからって

「ってか、なんでアカネを・・・」

「あんた小さいときからずっと言ってたじゃない。『アカネちゃんが好き』って」

「いつの話だよ・・・よく覚えてんな。幼稚園の時の話だぞ」
あの時はあんまり真剣に、というわけではなかったと思うけど・・・

「今はお互い野球とバレーがあるから・・・今は部活優先だよ」
俺は甲子園、アカネはインターハイ、それぞれ目標がある。それを達成することが今は一番大事だ。
しかもアカネが俺のことをどう思ってるかわからないし

「ふうん・・・まあいいわ。それよりもう着くから降りる準備しなきゃさい」

姉さんの言葉で外を見ると、平等院鳳凰堂の看板が見えたので俺は後ろの席をむいて

「もう着くから降りる準備しとけて・・・何食ってんの？」

後ろの席の3人を見ると、なんか食ってる。バリバリいってるけど

するとエリが

「あ、修紀も食べる？丹波産黒豆せんべい」

あゝ、駅でなんか買ってたな。これだったのか

「もう着くから片付けとけ」

「はい」「はい」

.....

現在10時ジャスト

目の前にはあの10円玉でおなじみのあれが

「10円玉のまんまだな」

「ほんとだね。なんかかつこいいね」

アカネとそんな会話をしていると

「ふたりとも手伝って〜!!」

三花の叫び声が聞こえたのでそつちをみると

「止めるな〜三花!! 仏像がわたしを呼んでるんだー!!」

「止まらんかいアホ! 拝観料まだ払ってないんじゃない!」

三花が必死で暴走モードのエリを止めている。三花は苛立ちで言葉遣いがだんだんひどくなっている

エリはああなるともう止まらないので

「アカネ、エリ頼んでいい? 姉さんと拝観料払ってくるから」

「いいよ。なるべく急いでね、三花もう限界みたいだし」

そう言つて、アカネはエリのもとへ、俺は受付へとむかった。

「え〜と、鳳凰堂内部拝観したいんですけど」

『高校生おひとり様700円、大学生は900円になります』
5人なので3700円を払おうとすると

「ここは私が出しとくわ。せつかくの機会だし奢ってあげる」
姉さんは財布を鞆から取り出した

「でも悪いよ。車までだしてもらってるのに」

「いいのよ。たまには姉さんらしいことさせなさい」

姉さんはそう言いながら財布からお金を取り出した

「高校生4人と大学生1人で」

『3700円になります』

すると姉さんは3700円ぴったり出した

「それではこちらチケットになります」

俺はチケットを受け取ると、アカネたちのところへと戻った

「……………」

俺と姉さんが3人のもとに戻ると異常な光景を目撃した

「アカネ！ストップストップ！エリ落ちちゃう！ってか死んじゃう！？」

「みが（三花）くだずげで〜」

アカネがエリの胸ぐらをつかんでエリは池の上に持ち上げられている。しかもエリの首は絞まりかけなので、このままいくと窒息しそうだ

「三花ちゃんどうしたの！？」

姉さんが三花に事情を聞くと

「あ、彩佳さん！アカネが切れて手に負えなくなってしまった」

「とりあえずアカネちゃんを止めないと……修紀！行きなさい！」

「俺！？なんで俺が……」

「修紀だってわかってるでしょ。ああなると修紀しか止められないって」

それは知ってるけど……

「早くしないとエリちゃん死んじゃうわよ」

エリはもうほとんど反応がない。ほんとにやばいかも

「はあ、わかった」

盛大にため息をしてアカネのところへむかう

「さあ、エリどっちがいい？窒息死？それとも溺死？」
笑顔で凄いこと言ってるぞ……目が笑ってねえ
もうエリもしゃべる気力ねえみたいだし

「さあエリ選びなさい」

ポンッ

アカネの頭に手を置く

「……………へ？」

どうやら正気にもどったようだ

「アカネ、エリ落とすなよ」
水没するから

「……………え？修紀くん？」

「とりあえずエリ戻してやれ」

「わー！？エリ！大丈夫！？」

アカネはエリを陸に戻して、手を離れた

「ごほつ、ごほつ、ああなんか、信代みたいな後光差してる人が見えた」

それってあの世に行きかけたんじゃないや・・・ってか中島似って・・・

「わたしまたやっちゃったの？」

アカネが真っ青になって聞いてくる

「うん」「」

俺と三花と姉さんがあっけなく答えると

パタッ

あっ、倒れた

「修紀、おぶってきなさいね」と姉さんが言う

「アカネ背負って拝観しろと」

アカネ背が高いから大変なんすけど・・・

「私と三花ちゃんはエリちゃんの介護するから」

「はぁ・・・」

そんなこんなでようやく鳳凰堂の中に入れた

「きゃー、ほんもの！ほんものだよ三花！」

「はいはい、よかったね」

エリはいつの間にか元気になっていて、仏像をみてはしゃぎまわっている

『あんなにはしゃいでる女子高生初めてみましたよ』

案内係の女性が苦笑いと言ってくる。確かに仏像マニアの女子高生なんてエリ以外聞いたことない

ちなみに今俺はアカネをおぶっていない

アカネは後ろのほうでうつむいて歩いている

三花にああなったいきさつを聞くと

- - - - -

「今行くよ！わたしの大仏ちゃん」

エリは三花に腰を引っ張られているに関わらず、引きずりまわしていく

「ごめん・・・アカネどうにかして、もう限界・・・」

「わかった、交代ね三花。エリ！いい加減にきなさい！」

アカネがエリの腕をつかんで忠告する。この時点ですでに切れかかってたらしい

「どかんかい！でかぶつ長身野球オタク」

ピクッ

この言葉が事件の引きがねになったらしい

「・・・でかぶつ？長身？・・・野球オタク？」

「ひいひい！」

アカネの顔をみて三花は思わず悲鳴をあげてしまった
その時のアカネの後ろには鬼が見えたらしい

未だにエリはアカネの変化に気づいていない

「さあ入ろう！もう入ろう！」

「エ、リ・・・」

「ん？」

ガッ！

「うつ・・・ア・・・苦し・・・」

いきなりアカネがエリの胸ぐらをつかんだ

だんだんとエリが持ち上がっていき、たまたま水際にいたので池の
上にあがったらしい

「・・・で、そのときに俺と姉さんが戻ってきたと」

「・・・で、そのときに俺と姉さんが戻ってきたと」

「そういうこと」

「これからは、あのアカネを『鬼神モード』とでも言うか？」

「どっかで聞いたことあるような・・・」

「そうぜ。ダの伝説です。それもム。ユラ

そんなこんなで鳳凰堂内とミュージアムの見学が終了した
結局楽しんでいたのはエリだけだった

- - - - -

アカネSIDE

わたしたちは今ミュージアムのお土産屋にいる

クリアファイルやトランプ、線香などたくさん売っている

うろろろ見て回っていると

（あ、これかわいい）

目の前には丸い玉のついたストラップが

『とんぼ玉ストラップ』だって

「修紀くんとおそろい買いたいなあ〜」「でもはずかしいなあ〜」

「何言ってるのエリ、三花」

後ろからエリと三花が現れた

「瀧はわかってるよ。アカネちゃんの思いは」

「わたしたちにまかせなさい。豪華客船佐伯丸に乗ったつもりで」

「すぐ沈みそうだから乗らない」
さつきからこのふたりは何を言ってるんだろう・・・

「おい！買ったったらはやくしろよ。和嶋たちと合流するんだろ」

修紀くんがレジのほうから呼んでいる。そうだ、お昼まき達と一緒に市場で食べるんだった

「で、買うの？買わないの？」

三花が今度は心配そうに聞いてくる

「先に行っちゃうよ」

エリは相変わらずニヤニヤしている

「うん・・・・・・買う！」

わたしは青と赤のをひとつずつ取ってレジへとむかった

そのあと彩佳姉ちゃんの車に乗り込んで錦市場へとむかった

・・・ストラップ、いつ渡そうかな

修学旅行！！その4（後書き）

大台「次回は他のモブ娘たちと合流します」

修紀「大丈夫か？そんなに増やして」

大台「和嶋まきと中西とし美がバレ部だと知ったのは年末だったからね」

修紀「……………」

大台「次回をお楽しみに」（汗）」

修学旅行！！その5（前書き）

大台「やっと修学旅行編が終わりです」

修紀「長かった」

大台「結構雑になっちゃいました」

修紀「それを言ったらあかんたる」

大台「まあ、いいじゃん。それではどうぞ」

修学旅行！！その5

現在時刻 12:20

場所は錦市場の近くの大通り

修紀SIDE

あのあと、姉さんに平等院から送ってもらった。

姉さんも一緒に錦市場を巡って昼飯を食うのかと思いきや

「彼氏から電話かかってきたからまた今度ね。わたしはいつでも行けるし」

と言つて、あつという間に去っていった。

そして今は、アカネたちと同じバレー部である和嶋と中西の班と合流するために待ち合わせ場所にて待機中。

「あの・・・修・・・紀くん」

建物の壁にもたれている俺にアカネが話しかけてきた。

「ん？どうした？」

「その・・・さっきはごめんね。気絶して・・・おぶってくれて」
アカネはうつむいて言ってくる。最後のほうは消えかけていた

「気にしなくていいよ。アカネ重くないし」
ほんとはちよつときつかったけど

「・・・／／／」

アカネは顔を真っ赤にしてうつむいている。

「あのね・・・」

「おい！」「遅れてゴメンね〜！」

アカネがなにか言いかけたときに和嶋たちが来た。アカネはなにか出そうとしていたが、今は触れないほうがいいだろう。

和嶋たちの班は、和嶋まき・中西とし美・遠藤未知子・菊池多恵の4人だ。

（ネット上にモブキャラまとめサイトがあるので詳しくはそちらで）

「んで、どこで飯食うんだ？」

合流できたところで俺が催促する。昼飯と一緒に食べるということが集まったのだ。

・・・ってか女子7人に男子俺だけってなんかづらいな。

「ふっふっふ、ちゃんと調べてきましたよ。バレー部5人で」

三花が自慢げに1枚の紙を鞆から取り出す。

そこには『自慢の京野菜をご提供』が売りの老舗？定食屋がプリントされていた。

「じゃあさっそく行くか」

錦市場に入って行こうとすると

「・・・・案内してください」

バレー部の5人が声をそろえて言う。

お前らが調べてきたんだろ・・・

10分後、三花の紙に書いてあった地図をもとになんとか迷うことなく店に着くことができた。

店の外観は、木造建築の2階建てで、かなり昔からの雰囲気漂わせている。

さっそくなかに入る。

「なんかいい感じのお店だね」

遠藤が店内を見渡しながら言う。確かにいい感じの店だ。

『いらつしやいませ。何名様でしょうか?』

中から着物を着た店員さんが出てきた。

「8人です」

と三花が答えると

『それではこちらのお座敷へどうぞ』

と、俺たちは奥の10人ぐらい座れる大きな座敷に通された。

「何食べる?」

メニューを机の真ん中において、みんなで眺めている。

どれも1000円以内で、割とリーズナブルだ。

『ご注文はお決まりでしょうか?』

店員さんが来たのでそれぞれ注文する。

俺は『京野菜のかき揚げ定食』にした。

みんなも京野菜がメインの料理を注文していた。

しばらくして料理が運ばれてきた。

ってか

「多っ！」

どの料理もかなりボリュームがあり、男子でもすぐ腹いっぱいになりそうだ。

しかし女子は

「すごいね」

「おいしそ」

量のことなんてまったく気にしていなかった。

そんな中、女子でふたり暗い顔をしているのがいる。

アカネと遠藤だ。

「どうした？暗い顔して」

ふたりに理由を尋ねると、まず遠藤が

「私こんなに食べられないかも・・・」

「ああ、未知子は少食だもんね」

横から菊池が言ってきた。なるほど、そういうことか。

「残しちゃったらわたしが食べるから大丈夫だよ」

横からエリが天ぷらをくわえながら言ってきた。どんだけ食ったんだよ・・・

「それで、アカネは？」

「・・・食べ過ぎると・・・その・・・」

ああ、いつものパターンか

「大丈夫だよ。野菜中心の料理だし、カロリーそんなに高くないと思う」

「・・・そうかな？」

アカネの顔が少し明るくなった。

「アカネぜんぜん太ってないんだし、大丈夫」

「・・・ありがと／＼」

そういうと、アカネは料理を少しずつ食べ始めた。

それをみてニヤニヤしているバレエ部連中に俺とアカネは気づいていなかった。

俺たちは新鮮な京野菜をしつかり堪能した。

結局遠藤が食べられなかったのはエリと三花がたいらげた。

そのあと店を出て、何をするのか尋ねると

「食べ歩き！！」

と言った。まだ食うのか・・・

アカネと遠藤は少し引いていた。

市場で試食や買い物しまくった。

焼き栗や漬物、お饅頭などかなり食べた。どんな胃してんだよ・・・
せっかくなので、持って帰る漬物とかもお土産で買った。

そのあとは嵐山をぐるっと回って帰ろうということになった。

今は渡月橋を渡っている。

バレエ部4人が先頭を歩き、その後ろを遠藤と菊池が、俺とアカネは一番後ろを歩いている。

「このあとは電車で帰るんだっただけ？」

「うん、時間ぎりぎりになるけど最後まで楽しまないかね」

アカネがちらつと携帯で時間を確認する。

今は16時半、17時には駅に行かないといけない。

嵐山に夕日が映えて桂川が茜色に輝いている。

橋の真ん中あたりにさしかかったときにアカネがいきなり立ち止まった。

「あのね、修紀くん」

「ん？」

振り向くとアカネが鞆から何やら小さな袋を取り出していた。

SIDEアカネ

夕焼けがきれいに映えている渡月橋の真ん中で修紀くんを呼び止めた。

エリたちはだいぶ前のほうに行っている。今ならあれを渡せるかな・
・。

「あ、あのね、修紀くん」

「ん？」

わたしは小さな紙袋から平等院で買ったストラップを取り出す。

勇気をだして

「あのね、これ、その・・・お、お礼」

赤と青のうちの青のほうのストラップを差し出す。
わたしは不安で目をつむってしまっている。

するとわたしの手からストラップを取る感触が・・・
目をゆっくり開くと

目の前で修紀くんがストラップを持ってニカツと笑っている。

「ああ、おんぶした時のか・・・。そっか、ありがとな。」
そういつてストラップを携帯につけてくれた。

「アカネも携帯につけるのか？」

「う、うん」

「そっか、じゃあ・・・一緒・・・だな」
修紀くんの顔は真っ赤になっている。

「う、うん。そうだね。おそろいだね。」
たぶんわたしも同じ・・・。それは真っ赤な夕日のせいなのかもしれない。

「エリたち行っちゃったな。ちょっと急ぐか」

「うん」

わたしたちは日の沈みかけた渡月橋を駆けていった。

一方そのころエリたちかというと
「青春だね」

「PTOもわきまえずによくやるよね」

渡月橋を渡りきったところの木の陰で6人は隠れていた。

「アカネちゃんと河野君って付き合ってるんじゃないの？」

多恵が三花に尋ねる。

「うん・・・付き合っていないけど、あれじゃ付き合ってるのと変わらないよね」

「そうなんだあ・・・」

未知子もふくと反応する。

「あ、ふたりがこっちに来るよ」

まきが指差しながら言った。

「じゃあ、そのベンチで待ってようか」

「見てなかった振りしてね」

とし美とエリが言くと、6人はさっと移動し始めた。

- - - - -

修紀SIDE

「すっかり日が暮れちゃったね」

エリが空を見上げながらつぶやく。俺たちは駅に行くために住宅街を歩いている。

あたりは日が沈み、街灯が道を照らしている。

「ほんとにぎりぎりになっちゃっね」

三花が地図を見ながら言う。電車の時間も気にしないといけない。

「そうだな、ちょっと急ぐか・・・ん？」

「どうしたの？」

前にいたアカネが振り返って聞いてくる。

「あれ・・・」

俺が指を指したその先には

「あははははは」

なぜか爆笑している秋山が・・・

「なにしてるんだろっね漣ちゃんたち」

三花が不思議そうに言う。

確かに、次の電車に乗らないともう間に合わないのに。

すると、琴吹がこっちに気づいたみたいで

「あ、河野君たちだ」

「ほんとだ！助かったあ」

平沢が安堵の笑みを浮かべる。

なるほど迷子だったのか・・・

「駅はこっちだよ！急がないと間に合わないよー！」

エリがこっちと手招きする。

結局、4班と一緒に帰るという大所帯となって宿舍へと戻って行った。

ってか、真鍋とか秋山もいるのになんで迷ったんだろっ。方向音痴なのだろうか。

- - - - -

宿舎に着くと、山中先生が入り口で立っていた。
入り口に入ろうとすると

「あなたたちが1番最後よ！不安になったじゃない！」
と怒られた。

「そもそもあなたたちは・・・」

なんか説教が始まった。なんでだろう、時間内に帰ってきたのに。

結局説教を発見した中年の先生が山中先生を説教することで俺たちは開放された。

- - - - -

修紀SIDE

今は帰りの新幹線の車内、みんな3日間の疲れが出てきたのか、ぐっすり眠っている。

ただ、軽音部だけは元気に騒いでいる。あいつら凄いな・・・。

俺の前にはエリと三花が寄りかかって、気持ちよさそうに寝息を立てている。

そして、俺の横ではアカネが俺に寄りかかって気持ちよさそうに眠っている。

俺は今後のことについて考えていた。

修学旅行が終わると、それぞれの部活の最後の大会がせまってくる。野球部は7月からだが、バレー部やバドミントン部など、インターハイを目指す部活は6月、早いところは5月の終わりには予選が始

まる。

いよいよ最後の大会にむけての追い込みが始まるのだ。

今まで練習してきたことを十二分に出すために、この2ヶ月はより集中して取り組んでいかなければならない。

甲子園に行くためにも・・・

- - - - -

俺はあの後眠ってしまい、気づくと降りる駅がもうすぐだった。

まさかエリと三花に俺とアカネの寄り添って寝ている写メを撮られているなんて思いもしなかった。

修学旅行！！その5（後書き）

大台「次回からは部活と梅雨！！を重ねながら書こうと思います。
あと、書き方も変えてみようと思います」

修紀「やっとメインに入れるな」

大台「感想、批判などなんでもいいのであればよろしくお願いします」

梅雨！！&顧問！！（前書き）

大台「今回また登場人物が増えます。そして、あんまり進みません」

修紀「内容が薄いな・・・」

大台「うるせい！難しいんだよ」

修紀「はぁ・・・」

大台「ため息つくな！！それではどうぞ」

梅雨！！&顧問！！

現在時刻 05:50

場所、河野家

修紀はすでに起きていて、朝練に行くために準備をしている。

ガチャ

「兄さん、朝ごはんできたよ」

修紀の部屋の扉を開いて入ってきたのは、修紀の妹である。

名前は『舞華』（まいか）。長くて真っ直ぐな黒髪をいつもポニーテールにしている。

背は高くもなく、低くもない。

今は中3で、地元のシニアチームに所属している。ちなみにポジションはキャッチャー。

土日しか練習がないので、中学では陸上部に所属している。

「わかった。すぐ行く」

修紀は鞆を持って1階へと降りて行った。

下に降りると、修紀の母親がすでに朝食の支度を終え、テーブルに並べている。

「あ、おはよう修紀」

「おはよう」

お互い挨拶すると、母親が弁当を修紀に渡しながら尋ねる。

「今日雨降ってるけど、どうするの？」

「うん、とりあえずアカネとエリにメールしてみる」
そう言つて修紀は携帯を取り出し、メールを打ち始めた。

「兄さん、今度スイングみてくれない？最近なんか打球伸びなくて・
・・」

修紀がメールを送信し終えたときに舞華が聞いてくる。

「いいよ、練習が終わつた後だからだいぶ遅くなるけど」

「わかつた」

♪
いきなり修紀の携帯が鳴つた。

「アカネ姉さんじゃない？」

修紀が携帯を開くと

「うん、アカネから電話だ」
そういつて、携帯を耳にあてる。

「もしもし」

『あ、修紀くん？エリに先に相談したんだけど、エリが合羽着て自転車で行こうつて。どうする？』

「うん・・・電車だとギリギリになるし、それで行くか」

『わかつた。じゃあエリにも言つとくね』

「よろしく」

ピッ

「結局どうするの？」

修紀が電話を切ると、母親が聞いてきた。

「自転車で行くよ。電車だと時間厳しいから」

「そっか。じゃあ合羽玄関に出しとくから」

そう言って母親はリビングを出て行った。

- - - - -

現在 06:05

場所は自宅前

ドザー

結構な強さで雨が降ってきている。

「おはよー」

アカネが合羽を着て出てきた。

「おはよ。ほんじゃ行くか」

「うん」

そう言っただけふたりはエリの家へとむかった。

「電車のほがよかった」

「今さらかよ・・・」

「エリでしょ。自転車で行こうって言ったの」
今、三人で雨の中必死に自転車を漕いでいる。
エリはもうすでに弱音をはき始めている。

「そういえば修紀、野球部って雨なのに何すんの？」
エリが唐突に修紀に聞いてきた。

「監督がどうするのかわからないけど、たぶんレギュラーが室内練習場で、それ以外は体育館が校舎で基礎トレかな」

「ふん」

「あ、体育館たぶんいっぱいだよ。予選近いからどの部も朝練すると思うし」
アカネが後ろから修紀に言う。

今週から本格的にインターハイ予選が始まる。
ちなみにアカネたちバレー部の初戦は今週の土曜日から市内の体育館である。

そのあとバスケ部、バトン部、ソフトボール部と続いていく。

- - - - -

「はあ、えらい目にあった」

エリが合羽を脱ぎながら嘆いている。

やっと学校にたどり着き、3人は自転車置き場の屋根の下で合羽を脱いでいる。

「今度は電車がいい」

「うん」

修紀の意見にふたりともそのほうがいいと思った。

「ほんじゃあな」

「うん、また後で」

「またね」

エリとアカネは体育館へ、修紀は室内練習場へとむかった。

- - - - -

室内練習場にて待機中

家から練習着を着てきたので、監督から連絡が来るまでストレッチしながら待機している。

「監督から連絡ねえな。練習どうすんだ・・・」

『おはようございます!』

修紀が声のしたほうをむくと、2年生が数人来ていた。

「ういっす。とりあえず軽くアップしといて。監督からまだメニューもらってないから」

『はい!』

そういうと、2年生は軽いストレッチから始めた。

監督からまったく連絡がないため、修紀は立ち上がり

（じゃあねえ、俺がメニニュー組むか。）

「高城、体育館の空き見てくるから他のやつきたら柔軟と補強やるように言っといて」

『はい、わかりました』

2年のひとりに伝言を頼み、修紀は体育館へとむかった。

「うわあ、アカネの言ってた通りだな・・・」

修紀が体育館に入ると、4つの部活が体育館を4面に割って練習している。

（これだと、柔道場もむりだな）

修紀がうくと体育館の入り口でうなっていると。

「あ、河野くん！どうしたの？」

女子バスケ部の娘が修紀に声をかけた。

彼女の名前は飯田慶子。2つのヘアピンで前髪をわけているショートカットで茶髪の女子で、修紀と同じクラス。

「室内どっか空いてないかと思ったんだけど、体育館は無理そうだな」

「うん、予選近いからねえ。どこの部活も気合入ってるよ」

「仕方ない・・・校舎でどっか借りるか」

修紀は職員室に寄り、その後練習場に戻ることにした。

修紀が練習場の中に入ると

「あ、河野。監督から連絡あった？」

3年で投手の藤井が修紀に声をかけた。

「ない。ってか職員室にもいなかった。時間ないから勝手にメニュー組んだぞ」

修紀がそう言つと、部員がそろそろと集まってきた。

全員がそろつたのを確認すると、修紀がメニューを伝える。

「メンバーはここでティーバッティング、ピッチャーとメンバー以外は多目的室借りたからそこで筋トレメニュー、以上」

『『ういっす!!』『』』

全員が返事をしたのと同時に動き出した。

現在野球部の部員は3年生が11人、2年生14人、1年生が15人となっている。

ちなみに、メンバーと言っているのはベンチ入りメンバーのことで、3年生は全員入っている。

1年生はメンバーに入っている部員以外朝練は8月までない。

ちなみにメンバーに入っている1年は唯一1年レギュラーの木下雄大だけ。

雄大は実は3年2組の木下しずかの弟。

背は姉に似て小さいが、根性があり、攻走守のすべてが優れている。

その後、8時過ぎまでティーを打ち込み、片づけをした後教室へとむかった。

- - - - -

現在08:15

場所は3年2組教室

SIDE修紀

俺は朝練の疲れからか、机に突っ伏していた。それはどの運動部も一緒だった。

バスケ部、バトン部、もちろんバレー部も・・・

「あ、あの、修紀くん・・・」

声のするほうに顔をむけると、そこには木下しずかと島ちずるがいた。

「うちの弟の事なんだけど・・・」

木下が唐突に聞いてきた。

「ああ、雄大のことか」

「最近部活でどうなのかなって・・・雄大家にいても野球のこと何も言わないから・・・」

なるほど、確かに家の人との会話少なそうだな。部活では喧しいのに・・・

「問題ないよ。普通にレギュラーで出てるし、調子もいいよ」

「そつかあ、よかったあ・・・」

俺が雄大のことを伝えたと、木下は安心したようで、安堵の息を漏らした。

「そうだ、今度試合観に行きたいんだけど、練習試合の予定教えてもらってもいい？」

「いいよ。雄大教えなさそうだもんね」

俺が日程表を鞆から出すと、木下はそれを持っていたメモ帳に写していった。

木下が書き終えたちようどそのとき

『濡れすぎ!!』

どこから突っ込みの声が聞こえてきた。その声に反応して前の入り口を見てみると、ギターを抱え、ずぶ濡れなっている平沢が・・・どうやったらそうなる。

その平沢を見たエリが机に寄ってきた。

「わたしたちの自転車でもあそこまではならなかったよね」

エリがぼそつと言っ。

「なにか神がかったもんでも持ってるんだろ」

「だよね。唯何回も奇跡起こしてるもんね」

エリはニヒヒと笑いながら自分の席に戻っていった。そしてまた机に突っ伏した。

それにつられ、俺も机に突っ伏し寝てしまった。

- - - - -

『いいからはやく着替えてきなさい!!』

誰かの怒鳴る声によつて俺は目覚めた。

教室を見渡してみると、なぜかメイド服を着た平沢がいて、その横にはジャージを持った真鍋が・・・。

そして教卓の前で平沢をにらんでいる山中先生。

・・・現状がまったく理解できない。

その後、平沢はジャージに着替えに行った。

- - - - -

午前中の授業が一通り終わり、今は昼休み。

俺は昼飯を食い終わり、職員室へとむかっている。

顧問に放課後練習の内容を聞きに行くためだ。

朝練に来なかった日はこうやって聞きに行かなければならない。聞
きに行ってもいないことが多いんだけど・・・。

ガチャッ

「失礼します」

職員室の扉を開けて、入るときに一礼する。

一番近いところにいた山中先生に尋ねる。

「山中先生、おきの沖野先生いますか？」

「えーと・・・さっきまでいたんだけど」

「また視聴覚室ですかね」

「たぶんね」

俺が尋ねると山中先生は苦笑いする。

沖野先生は授業のない時間帯に視聴覚室にこもっていることが多い。

山中先生に一礼して俺は視聴覚室へとむかった。

ガチャッ

「失礼します」

視聴覚室の扉を開けて、一礼する。

部屋の前のほうを見ると、ビデオをみている顧問の姿が

「沖野先生、放課後練習のことなんですけど・・・」
声をかけると、沖野先生がこっちに振りむいた。

実は沖野先生は今年から赴任してきた新任教師。しかも女性。

小学校から大学まで野球をしていたらしく、かなり野球に詳しい。

割とルックスがよく、男子生徒から人気がある。

春の大会まで監督を務めていた先生はその大会を最後に他校へと転勤となった。

「あ、河野君か」

「また他校の公式戦のビデオですか？」

「ええ。強豪校は一通り調べておかないとね」

机にはスコアブックとびっしり書かれたノートが。

先生はこうして毎日のように県内の高校を調べている。

「で何の御用？」

聞いてなかったのか・・・

「放課後の練習のメニューですよ。先生朝いなかったから」

「あ、ごめんね。妹の支度に手間取っちゃって。これに書いてあるからよろしくね」

そう言っ先生は一枚の紙を渡してきた。

「綾音ちゃんですか、まだ小2ですもんね」

そう言っ紙に書かれた内容をみてみる。

相変わらず丁寧で効率のいいメニューを組んである。

「まだまだ小さいからね。河野君そろそろ昼休み終わるわよ」
そう言われて時計をみると、あと5分で授業が始まる。

「ほんとですね。それじゃあ教室に戻ります」

「はい。おつかれさま」

「失礼しました」

そう言っ視聴覚室をあとにした。

その後、午後の授業も終わり、放課後になった。
俺は席を立ち、アカネのもとへとむかう。

「アカネ」

「ん？どうしたの？」

「週末試合だろ？試合の日程聞いておこうと思って」
昼からだっ たら応援に行けるだろうし。

「えーと、じゃあこの試合表余ってるからあげる。見方わかるよね？」

そう言っ てアカネは大きめの紙を差し出してくる。

「うん。野球のと変わらないから」

「それじゃあ部活行くね。修紀くんも部活だよな」

「うん。それじゃ」

そう言っ てアカネは体育館、俺は室内練習場へとむかった。

梅雨!!&顧問!!（後書き）

次回からインターハイ予選に入ります。

修紀とアカネの過去もできればやりたいなと思います。

読んでいただきありがとうございました。

最後の総体（前書き）

修紀「結構かったな」

大台「どうやって過去編につなげるか迷っちゃって・・・」

修紀「やっとこの作品の本題だな」

大台「そーだねー」

修紀「それではどうぞ」

最後の総体

6月初旬の土曜日

現在時刻 06:00

場所 佐藤家

アカネSIDE

今日はインターハイ地区予選当日。

市立体育館で行われる初戦にむけてわたしは気持ちを高めていた。

パシッ

「よしっ」

鏡の前で頬を一回叩き、気合を入れる。

『アカネ〜ご飯できたわよ〜』

下からお母さんの声が聞こえた。

「今行く〜」

そう言って部屋を出ようとすると

ピリリリ

携帯の着信音が鳴った。

携帯を開くと

「メールだ・・・ふふっ」

『今日初戦だな。練習試合あるから応援行けないけど頑張れよ!』
修紀くんからだ。

「『メールありがと……』……送信つと」
修紀くんはメールを返信して、階段を降りていった。

- - - - -

現在時刻 07:00

場所 桜ヶ丘高校グラウンド

修紀 SIDE

今はグラウンドで試合の準備をしている。

パイプ椅子を並べたり、グラウンドにラインを引いたり、マネージャ
ーはアナウンスの準備をしている。

ちょっと今日はいつもと雰囲気の違い全体的にピリピリしている。

その理由は、今日の相手が春のセンバツ王者であるからだ。

つまり、今日本一のチームと試合をするということである。

おおかた準備が終わり、一度部室に戻る。

携帯を開くと、メールが来ていた。

『メールありがと。そっちも試合頑張つてね。試合終わったらまた
メールするね』

アカネからだ。やっぱり緊張してんのかな……

「お、彼女からかあ？」

後ろを振り向くと藤井がニヤニヤしながら携帯をのぞいていた。

「そんなんじゃないよ。……それよりお前はすぐに代えられない

ような」

「大丈夫だ！今日は調子いいからな！！」
いつも言ってる気がするな・・・

「まあいいか、アップ行くぞ」
そう言っただけでグラウンドに出ていった。

- - - - -

現在時刻 12:32

桜高グラウンドにて試合中

現在 8 回の裏

桜高の攻撃中

6、5 で桜高 1 点のビハインド

結局藤井は 4 回 4 失点というまあまあの内容でマウンドを降りた。
球数があまりにも多くなったために早めの交代となった。

そのあとは 2 年生投手が 2 失点でここまできた。

『1 番セカンド木下君』

アナウンスがかかる。

この回は 1 番からの好打順、この回に追いつかないと絶望的だ。

カキーン

『レフト前!!』

ベンチがわあつと湧く。雄大が先頭で出た。

- - - -

場所は変わって市立体育館

女子バレーのインターハイ予選真っ只中

「アカネっ!」

「ハイッ!」

バシッ!!

ピー

「やったー!」

「ナイスアカネ!」

アカネSIDE

セットカウント25 - 13

2 - 0のストレートで初戦は勝った

試合が終わり、一礼した後コートを出て、上の観客席へと移動した。

「アカネー！！やったよー！」

エリがいきなり後ろから抱き着いてきた。満面の笑みだ。

「とりあえずー安心だね」

「緊張したね」

三花とし美も笑顔で駆け寄ってくる。

無事初戦を突破できて、みんな緊張が少しほぐれたみたい。

「アアアアア！！」

「「「「！？」」「」」」

いきなりとなりのコートからとてつもない歓声が聞こえた。

「み、みんなあー！！大変だよー！」

すると、となりのコートをのぞきに行つてたまきが大慌てで戻ってきた。

どうしたんだろう・・・

「どうしたの？まき」

とし美が息を切らしているまきに駆け寄り、どうしたのかを聞くと

「はあ、はあ、りゅ、龍山が負けた」

「「「「え！？」「」」」

まきの言葉を聞いた時は信じられなかった。

龍山といえは3年連続でインターハイ本選に出場している学校で、わたしたちも新人戦の決勝でストレート負けしている。龍山に勝つなんていったいどんな学校・・・

「しかも、ストレート！」

「……！？」

そんなことがあるの！？いったい相手校はどんなところ・・・

「あ！あそこにいるよ」

まきが指を指すほうを見ると、そこには席に並んで座っていく選手がいた。

高校名は・・・

「・・・アイビリーグ学院」

「全員大きいね・・・」

三花が思わず呟いてしまう。

確かに、パツと見ただけでも平均で175cmはありそう。

「ねえ、あの人たち留学生かな」

とし美の声につられて、よくみると、白人や黒人の人もいる。180cm超えてるんじゃない・・・。

「遙ちゃん！トーナメント表！」

「あ、はい！！」

三花がいきなり2年のスコアラーの遙にトーナメント表を出させる。お礼を言いながらそれを受け取ると、パツと広げた。

「あそこと当たるのは……決勝だね」

「決勝……」

アイビリーグ学院は反対側の山だった。

みんな黙り込んでしまった。そうなくても仕方ないと思う。

わたしたちは龍山高校を倒し、インターハイに行くためにいままで練習してきたのに、その龍山を圧倒する高校が現れたのだから……

パンツ

「はい、みんな！そんなしけた面しない！」

エリがいきなり手を叩いてみんなに喝を入れる。

「龍山が負けたからって何だって言うの!？」

「エリ……」

「龍山でもアイ……なんとかでもやることは同じでしょ」

……みんなの表情が変わっていく。

暗くなっていたのがみんな力強い表情に変わっていく。

「わかったら移動するよ！次の相手の試合観にいくよ！」

『はい!!』

チームの雰囲気が変わった。

エリは昔からこうやってチームメイトに喝を入れて、勇気づけてきた。

どんなに自分が辛い心境にいても、時には怒って、時には笑ってみんなを励ましてきた。

エリはそういうことができるから、常に周りの人のことを思って動けるからこそキャプテンをやっているのだろう。

このチームがここまでやってこれたのもエリのおかげ・・・

・・・そして、わたしが野球をあきらめ、バレーをやると決意できたのも全てエリと・・・

・・・修紀くんのおかげだった。

最後の総体（後書き）

次回から過去編に入ります。

頭の中では構想できているのですが、文章にするとなかなか・・・

では

思い！！（前書き）

大台「ごぶさたしておりました。今回から過去編に入ります。何話に分かれるかわかりませんが、ぜひ読んでください。
それではどうぞ。」

思い！！

今から6年前

わたしたちが小学6年生の冬

小学校最後の大会を終え、中学校へ進学するための準備を進めていた。

そんなある日、悲劇が起きた。

そしてその日、わたしは野球をやめた。

その日は、修紀さんとエリと一緒に近所のスポーツショップに来ていた。

「ねえ、これなんかどうかな？」

「ちゃんと大きさ合ってるのか？」

「なかなか決められないよね」

わたしたちは中学から硬式のクラブチームに入団するため、硬式用の道具を買いに来ていた。

しかし、バッティング手袋などはすぐに決められたけど、3人ともグローブがなかなか決められない。硬式用は高いからそう簡単には決められない。

結局その日はグローブを買わずにお店を出ることになった。

「やっぱり硬式用高いな」

「そうだね。お小遣いじゃ足りないし」
エリとグローブのことを話していると

「このあとどうする？」

修紀くんが大きく伸びをしながら聞いてきた。

「うん」と3人で考えていると、エリが
「じゃあ、修紀の家行こうよ！」

「俺んち？」

「うん、裏庭でティー打てるじゃん。ちょっと練習しようよ」

「そうだね。最近練習できてなかったし」
最近は進学の準備やクラスで遊びに行ったりで練習できていなかった。

わたしたちは修紀くんの家にむかった。

- - - - -

修紀SIDE

俺の家に着くと荷物を部屋に置いて、そのまま裏庭にむかった。

「あ、まだ軟球なんだね」

俺がボールの入ったかごを持ってくると、エリが軟球をみてぼそっ
と言う。

さすがに硬球はまだ集めきれてない。

それに、

「家でさすがに硬球は無理」

ちよっとミスしたらどっか壊れるし、危ない。

「そうだよ、エリはどこに打つかわかんないし」

「ふたりともひどいよー！」

「あはははははは」

そのあと、舞華も打ちたいって入ってきて、4人でしっかりと打ち
込んだ。

やっぱりエリは1球ネットを外して家の壁にぶつけた。やっぱり硬
球じゃなくてよかった。

そのあと1時間ほど打ち込んだ後、休憩することになった。
家の中に上がろうとした時

『あ、アカネちゃん。お母さんから電話があっっていますぐ帰ってき
てって』

「あ、はい。わかりました」

「なんだろうね?」

「わかんない。とりあえず帰るね」

「うん。気をつけて」

「アカネ、また明日」

「うん、じゃあね」

アカネは走って帰っていった。

そのあと、俺とエリは1時間ほど俺の部屋でゲームして、暗くなる前にエリも帰っていった。

- - - - -

翌日、平日の朝

「おはよー」

「おはよ」

教室へ入ると、エリが寄ってきた。

「ねえ、今日学校終わったらグローブ見にいこうよ」

「昨日の店に行くの?」

「ううん、今日は隣町のお店。もちろんアカネも誘って」

「そういえば、アカネまだ来てないな」

「珍しいね」

ガラガラガラ

『おー座れよー、授業するぞー』

担任の先生が入ってきた。

「熱かな？」

「どうなんだろう・・・とりあえず座らないと先生に怒られるな」
そう言っただけでエリはとりえず席に着いた。

- - - - -

翌日、またその次の日もアカネは学校に来なかった。

その日の放課後

「どうしたんだろ、アカネ・・・」

エリが不安な表情で机に突っ伏している。

3日連続でアカネが休んだことは今までで1度もなかった。

しかも、アカネの家に電話をかけてもまったく出なかった。

「先生に聞きに行くか、なにか知ってるかも」

「・・・うん」

俺とエリは職員室にむかった。

廊下を歩いている間ずっとエリは下をむいてた。

俺は何か嫌な、風邪とかそんなんじゃないくて、もっと大事のようなものを感じ取っていた。おそらくエリも感じているのだろう。

ガラガラ

「失礼します・・・」

職員室のドアを開けて、担任の先生を探すが、見当たらない。

「すみません、藤先生は・・・」

近くにいた顔見知り先生に尋ねると

「ああ、藤先生ね、なんか児童のところに行くって出て行かれたけど」

「そうですか・・・」

「ありがとうございます」

その先生に一礼したあと、職員室をあとにした。

「・・・ねえ、修紀」

「ん？」

職員室から教室に戻るために廊下歩いていると、エリがいきなり立ち止まった。

そして、真剣な表情になった。

「・・・アカネん家に行こ」

「いいのか？先生の言葉無視して・・・」

実はアカネの家に行つてはいけなないと先生に釘を刺されていた。俺たちはインフルエンザか何かだと思つていたが、インフルエンザとかよりももっと違う何かじゃないかと思ひ始めた。それはエリも同じみたいだ。

「仕方ないよ・・・アカネ、心配だし・・・」

エリは今にも泣き出しそうな顔をしている。不安が溢れ出しているんだろう。

「・・・行くか」

「え？」

「アカネの家行くぞ、今すぐ」

俺はアカネの家に行くことに決めた。このモヤモヤはたぶん直接確かめないことには解決できないと考えたから

「うん！-」

俺たちはランドセルを背負つてすぐにアカネの家へと走り出した。

- - - - -

「ちょっと待て！」

俺は道の角を曲がろうとしたエリのランドセルをつかむ。

「何すんの！？もうそこじゃん！！」

確かにここを曲がればすぐなのだが・・・

「静かに・・・アカネの家の前に先生がいる」

「えっ？」

そう言ってエリが角の陰に隠れながらアカネの家を覗きこむ。
すると、アカネのおばちゃんが出てきた。

「なんか話してるな・・・」

おばちゃんと先生が少し話し込んでいると、家から誰か出てきた。
家の塀でよく見えない・・・

「あ、先生帰るみたいだね」

先生が家から離れていく。

するとおばちゃんともうひとり家の敷居から出てきた。

・・・アカネだった。

「病気なら出て来れないよな」

「・・・うん」

そうしているうちに先生が帰って行った。そしておばちゃんが入っていった。

アカネはなぜか家の前から動かなかったたので、ここだと思い
「行くぞ、エリ」

「う、うん」

俺たちは角の陰から飛び出した。

そして

「「アカネ!!」」

「・・・エリ・・・修紀くん・・・」

アカネの顔は真っ黒なクマができていて、少しやつれていた・・・。

動揺（前書き）

7ヶ月ぶりの投稿になります。
読んでくださっていた方々、大変申し訳ありませんでした。

動揺

やつれた顔で目を真っ赤にしているアカネ。

もう涙も出なくなってしまうたぐらい泣いた、そんな顔だった。

「・・・・・・・・」

言葉が出ない。何を言えいいのかわからない。何も思いつかない。

アカネのこんな表情を見るのは初めてだ。

それはエリも同じで、エリも固まってしまっている。

「よ・・・よう」

やっと出た言葉がこれだった。

これが精一杯だった。

そして、アカネから出た言葉は

「・・・・・・・・ごめんね」

ただこれだけの言葉を残し、アカネは家の中に入っていった。

俺とエリはその場で立ち尽くしていた。

- - - - -

何がなんだかわからなかった。

「アカネの家に先生がいて、アカネが泣いてて……」

あのアカネを見て何をしたらいいのか、何をすべきだったのか。

喪失感

家に帰っても、ベットに横になっても、
残ったのはそれだけだった。

その日の夜だけは目を瞑ることができなかった。

- - - - -

「寝れなかった……」

結局一睡もできなかった。

頭の中が未だに整理できていない。

アカネの身に何があったのか。

先生が家に行くと言った理由は？

なぜ先生はアカネの家に行っていたのか。

学校に着くとエリが先に来ていた。

俺が教室に入ったときにこっちをむいたエリの顔は俺と同じだった。

とりあえずエリの席にむかう。

「おはよ」

「おはよう……」

エリの目には光が灯っていなかった。

明らかに寝不足の顔、俺と同じように一晩中悩んでいたのだろうか。

アカネの席を見るが、

アカネは今日も来ていない。

いったいどうしたのだろうか……。

ピンポンパンポーン

考えこんでいると、いきなり校内放送が流れてきた。

教室のスピーカーに耳を傾ける。

『6年の河野、瀧、いますぐ職員室に来なさい』

その声は藤先生のもだった。

クラスの男子が

『なんかやらかしたのかよ』

と茶化してくるが、俺とエリはそれに答えることなく教室を出ていった。

「お前たちを呼んだ理由は概ね察しがついているだろう」

「……アカネ、佐藤さんのことですか？」

「そうだ。佐藤のほうからお前たちにだけ渡してほしいと手紙を預かってる」

先生はそう言いつと、机の上にあるクリアファイルから手紙を二枚取り出した。

先生が差し出したのをうけとる。

そこには『修紀くんへ』と書かれてある。

「佐藤が来られなくなった理由はな、あいつの親が原因だ」

「おじさんとおばさんが？」

アカネのおじさんとおばさんはとても明るくていい人で、試合も毎試合応援しにきていた。

うちの親とも仲がいい。

最近この近所に大きな宗教団体の本部ができたらしい。

そういえばウチにも何度か勧誘に来たことがあった。

そのときに無理やり家に上がろうとしたので通報したこともあった。

その宗教にアカネの母親が取り込まれてしまったらしい。宗教団体に莫大な金をつぎ込んでしまい、気づけば莫大な借金をしていた。

母親は娘の身を神に捧げると言って教師にアカネを差し出したらしい。

アカネは暴行、精神的苦痛を受けた……。

父親は蒸発。母親は負債を抱え込んで昨夜夜逃げをした。

アカネは北関東の児童養護施設に引き取られ、今日は入所の手続きをしている。

「……………」

先生の言ったことは半分ぐらいしか理解できなかったが、こういうことらしい。

「佐藤は施設の関係で転校する。明日には出発するから会えるのは今日の夜だけだ」

キンコーンカーンコーン

チャイムが学校に鳴り響く。

すると、先生たちが朝のHRのために移動を始める。

そして、藤先生も立ち上がり

「その手紙は他のやつには見せるなよ。大事にしまっとけ」

- - - - -

その日の授業は全く頭に入らなかった。

早く手紙を読みたい。早くアカネに逢いたい。

それだけで頭がいっぱいだった。

終わりのHRが終わると俺とエリは真っ先に教室を出て行った。
そのまま校門を出て、アカネの家へと走っていく。

外は夕方になっていないのに薄暗く、曇り空になっていた。

アカネの家に着くころにはすでにあたりが暗くなり始めていた。
春になりかけてはいても、まだまだ日は短い。
少し肌寒くもなってきた。

アカネの家は物がほとんどなくなっていて、『KEEP OUT』の
テープが巻かれていた。

「アカネ・・・まだ帰ってきてないのかな」
そう言ったエリの声は若干震えている。

親友がいきなり学校に来られなくなって、家に来てみると廃屋にな

っついてテープがグルグルに巻かれている。
俺の手のひらも汗でびっしょりになっている。

「ねえ、どうしょ・・・」

確かにこれでは何時にどうなるのか全く分からない。
アカネがここに来ると決まったわけではないし・・・。

「うーん・・・」

勢いで来たはいいものの・・・。

「修紀ー！エリちゃん！」

どうしていいか分からず、立ち尽くしていると、遠くから俺たちを
呼ぶ声が

1台の車が俺たちの前で停まる。

中から顔を出したのは俺の母親だった。

「早く乗りなさい！アカネちゃんならうちにいるから！」

「えっ！？」

「は？」

呆然としたまま車に乗せられ、俺の家へと走り出した。

- - - - -

車が家の前に停まる。

すでに近所の家も明かりがついていて、ところどころで子供たちが帰ってくる声が聞こえてくる。

俺とエリはなかなか家に入ろうとしない。

入りづらいのだ。

そんな俺たちを見かねてか、母さんが

「ほらほら、早く入らないと。アカネちゃんが待ってるわよ」

さあさあと俺とエリは背中を無理やり押されながら家の中に入ってしまった。

とりあえずリビングに入ってみたが、アカネの姿はない。

「修紀の部屋じゃないの？入っていいって言っておいたから」

俺の部屋・・・

俺はリビングを出て、階段を見上げる。

「・・・・・・」

どんな顔をすればいいのだろうか。

行っって何を話せばいいのだろうか。

俺が階段の前で立ち止まっていると、後ろからエリがポンツと背中を押してくれた。

「行っってきなよ。思ったことそのまま言えればいいから」

「え？でもエリも・・・」

「
いいからいいから」

俺はエリに言われるままに階段を上がり、自室へとむかった。

動揺（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

次話をもっと早く投稿できるように頑張ります。

つながる！！（前書き）

今回は短めです。

簡単にしすぎたかな・・・汗

つながる！！

「・・・・・・・・」

俺は今自室の扉の前にいる。

ここに入ればアカネがいるんだろうけれど……。

意を決して扉を開ける。

扉を開けると中は薄暗くてよく見えない。

が、部屋の棚の前に立っているのがアカネだってことはすぐにわかった。

「しゅ、修紀くん？」

扉のそばにあった明かりのスイッチを押す。

部屋が明るくなると、アカネの姿がはっきりと見えた。

「・・・・・・・・」

アカネは下を向いたまま黙りこんでいる。

少し困惑しているみたいだ。

「・・・・よ、アカネ」

とりあえず軽く声をかけると、俺はベッドに座る。

そしてベッドを軽く叩いて座るように促すと、アカネはゆっくりと俺の横に座った。

「えつと「野球・・・やめるのか？」・・・え？」

アカネの言葉を遮り、言葉を口にする。

「手紙の内容・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

手紙の内容・・・それは、野球をやめなければならぬというものだった。

「施設の手続きに行ってきたんだけどね、野球は施設の都合でできないって。お金とかかかりすぎるから・・・」

確かに野球は他のスポーツと比べて道具やユニホームの数が多く、金額も高い。

施設に入れば、子供ひとりにかけられるお金は限られてくるからそのせいだろう。

「私ね、むこうの中学でバレーボールやることに決めたの」
アカネは何かを決したように前を見つめている。

「バレー？」

「そう。実はね、エリにだけ先に相談したの。そしたらエリも一緒にバレーやってくれるって」

ああ、だからエリは一緒にここに来なかったのか・・・。
知っていたから。先に話はしていたから。

「・・・そつか。もう3人で野球できないのか」

「・・・でね」

アカネがこつちをむく。
顔が近い・・・／＼。

「修紀くんに託すね、私たちの夢」
アカネの夢、エリの夢・・・俺の夢。

「甲子園・・・」

「うん、楽しみにしてるから」

そう言ったアカネは笑っていたが、目からは涙がこぼれていた。

「よし、わかった。約束する」

自信はなかった。

甲子園なんて夢の世界、そんな風に思ってた。
でも約束した。

アカネの笑顔を壊したくなかったから。

「でね、その・・・ちよつと付き合つて」

「ん？」

アカネは俺の腕を掴んでそのまま部屋を出て行く。

すると、廊下にあった俺のキャッチャーミットと用意してあったのか、玄関に置いてあったアカネのグラブを持って家を出て行った。

- - - - -

アカネに連れてこられたのは家の目の前にある空き地。
俺たちが初めて野球をした場所でもある。

空き地に入るとアカネは俺にミットを渡して距離をとった。

「今日修紀くんの家に来たのはね、このためなの」

そう言うときアカネはシュツとボールを投げてきた。

この空き地は住宅地の真ん中にあるから周りの家の明かりや街灯のおかげではっきりボールが見える。

パンツとミットの乾いた音が響く。

「最後に私の球受けて欲しくて」

俺はアカネに軽く投げ返す。

アカネのグラブがパシッという音を響かす。

俺は無言でスツと座りミットを構える。

パンツパンツと二回ミットを拳で叩いて構えなおす

「よしっ、来い！」

「ふふ、ありがと」

すると、アカネはにこつと笑って大きく振りかぶった。

ゆっくりとモーションに入っていく。

がばつとモーションのスピードを上げると一気に腕を振りぬいた。

スバアンツ

「ナイスボール！」

「へへっ」

これが最後だとわかっていたけれど、ふたりに涙はなかった。
ふたりの顔は笑顔だった。

これが最後ではないということもふたりはわかっていた。

つながる！！（後書き）

次回から元の時間に戻ります。

読んでくださりありがとうございました。

兄妹！！（前書き）

今回からは河野家兄妹の話になります。

そろそろ軽音部も出さないと・・・。

兄妹！！

13：03

桜高グラウンド

修紀SIDE

スバアンツ！

「ストライクツ！バッターアウト！」

練習試合も9回表に入り、7-6で桜高のリード。

8回裏に雄大が出塁した後、3連打で一気に2点をとり逆転。
この回を押えれば勝ちとなる。

そして、マウンドにはストッパーとして俺が立っている。
すでに2アウト。

俺はひとつ間を置くためにロジンを手に取る。

（そういえばこのグラブ、アカネにもらったんだよな）
離れ離れになったあの日、アカネはオーダーしていたグラブを俺に
くれた。

俺はピッチャーをやる時はずっとこのグラブを使ってきた。
中には刺繍で『叶える 佐藤アカネ』と書いてある。

（あとひとり・・・）

ロジンを置き、キャッチャーのサインを見る。

それに頷くと、モーションに入る。

しっかりと腕を振って投げた球はキャッチャーミットに吸い込まれるように入った。

結局、そのバッターをしとめ、7 - 6で勝利した。

- - - - -

14:32

桜高正門

アカネSIDE

空から視点

女子バレー部一行は学校に着くと、先生が軽く話をして解散ということになった。

多くの部員たちは試合で疲れているため、すぐに家に帰ろうとするが、アカネ・エリ・三花の3人は野球部が試合しているグラウンドへと歩き出した。

「もう試合終わってるよね」

エリが携帯で時間を確認する。

「うん、今日は1試合だけって言ってたから」

「・・・で、アカネ、その待ち受け何？」

三花がアカネの後ろに回り込んで携帯を覗き込んでいる。
エリもニヤニヤしながら携帯を覗き込んでいる。

アカネの携帯画面には修紀の打席の写真が映っている。
ハッとしたアカネは携帯をすぐに抱えるように隠して
「え、えつと・・・これは、その・・・／＼／」
アカネの顔は茹蛸みたいに真っ赤になっている。

「うらやましねえ」

「うんうん」

エリと三花はチャンスだとアカネをからかう。

「う・・・／＼／」

それに対して、アカネは真っ赤になって何も言い返せないでいると

『何が羨ましいんだ？』

「」「え？」「」

アカネ視点

私たちが振り返ると、ユニホームを真っ黒にした修紀ちゃんと制服姿の舞華ちゃんが立っていた。

「いきなり後ろに立たないでよ・・・って舞華ちゃんも？」

「こんにちは」

舞華ちゃんはペコッと頭を下げる。

相変わらず礼儀正しい娘だ。

「噂の彼・・・エリ！！」

「？」

いきなりエリがボソツと言うから焦った。

修紀くんには聞こえてないみたい・・・よかった／＼。

それを見かねた三花が

「あはは・・・。河野くん、もう部活は終わったの？」

「うん、一応勝ったよ。お前らもその様子だと勝ったみたいだな」

修紀くんがそう言うと、エリはニシシと笑いながらVサインをした。
私と三花も嬉しそうに笑って答える。

「俺らこれから帰って舞華の練習に付き合っただけど、お前らどうすんの？」

修紀くんのすでにバックとバットケースを肩に掛けていて、帰る準備万端だった。

舞華ちゃんのほうも学校指定の鞆を持っていて、なんだかそわそわしている。

練習が楽しみで待ちきれないみたい。

「どこでやるの？」

「うちの庭です。軽めにしきませんし」

私の問いに舞華ちゃんが答えてくれる。

修紀くん家は庭がちょうどピッチングできるぐらいのスペースがあるから軽い練習ができる。

「河野くんちって結構遠かったよね」

三花がうんと唸る。

三花の家は修紀くんの家と逆の方向にある。

ここから修紀くんの家に行って、また帰るとなるとかなりの距離になる。

「まあいつかあ。エリの家にも遊びに行きたいし」

「軽っ」

唸るほど悩んでたんじゃないの？

「じゃあうちの両親来てますから、一緒にどうぞ」

舞華ちゃんが指差した先には一台の車が停まっていた。

さあさあと舞華ちゃんに背中を押されながら車へと歩いていった。

「なんか舞華ちゃん嬉しそうだね」

「舞華は姉ちゃんが欲しかったんだと。アカネには昔から懐いてるよ」

エリと修紀くんが何か言ってたけど、気にせずに車に乗り込んだ。

- - - - -

「着替えてくるから、兄さん先に庭行つてて」

「わかった、防具着けてこいよ」

はーいと言いながら舞華ちゃんの家の中に入ってしまった。
私たちは修紀くんの部屋に鞆を置き、庭へと出た。

すると、修紀くんにはいつとグラブを渡された。

「アップするから受けてくれよ」

「え、でも・・・」

「大丈夫、軽くだから」

そう言くと、修紀くんは自家製のマウンドへ上がった。
私はホームベースのところでグラブを構える。

3年ぶりかな？中学のときに再会して以来だから。

シュツと修紀くんの球がいい音を立てる。

それを受けて、投げ返す。この単純な動作が嬉しかった。

「アカネ嬉しそうだね。生き生きしてる」

「久しぶりのキャッチボールだからね」

三花とエリは縁側に座っておしゃべりしている。

5分ぐらいしたところで舞華ちゃんが出てきた。

「うわ、なんかすごいね」

三花が言ったとおり、キャッチャー防具に身を包んだ舞華ちゃんは何か凄く見える。

「じゃあ、兄さんよろしく」

「おお」

舞華ちゃんがスツとしゃがみ、構える。

すると、修紀くんはモーションに入り一気に腕を振り降ろした。

ゴオッ!!

と音が立ちそうな球が舞華ちゃんのミットに吸い込まれるように走る。

スバアンッ!!

「うわっ」「」

町中に響くミットの乾いた音に3人とも声をあげてしまった。

「修紀！今の本気で投げたの!？」

音にびつくりしてひっくり返っていたエリがバツと起き上がって言う。

確かにびつくりした。近くで見たらこんなに凄いなって……。それを捕る舞華ちゃんも凄い。

「いや、まだ半分ぐらいだよ」

こんなに速いなって……。って

「『半分!?』」

「兄さんの本気の球は150キロ超えますよ。さすがにそんな球は捕れないです」

「ひゃ・・・150キロ・・・」

何だか未知の世界のもののような・・・。

エリも三花も呆然としてる。

「じゃあワンバン投げるぞ」

「うん」

舞華ちゃんが構えると修紀くんがボールを投げた。
投げたボールはホームベースの正面でバウンドする。
ドゴツつと鈍い音が鳴る。

なんと舞華ちゃんはプロテクターの真ん中で受け止めた。

「!?!」

三花はびっくりして口が開きっぱなしになってる。
エリと私は昔修紀くんがやってたのを見てたから、そこまで驚かなかったけど・・・やっぱり生で見ると怖いし、痛そう・・・。

「兄さん、20球全部止めたら映画だからね」

「はいはい、お前まだ一回もできたことないだろ」

「映画って?」

エリが舞華ちゃんのそばにしゃがみながら聞く。

「前から言ってるんですけど、なかなか連れて行ってくれなくて、マスクを外した舞華ちゃんの顔はなんだか寂しそうだった。」

「……よし、ここは姉さんとして一肌脱ごうかな。」

「だから、友達と……アカネ？」

私はマウンドに上がると修紀くんに近づく。

顔が近い／＼……けど、これは舞華ちゃんのため！

「修紀くん、連れて行ってあげなよ。舞華ちゃんはね、ただ修紀くんと一緒に遊びに行きたいだけなんだと思うよ。」

顔が近くて恥ずかしいけど、これも舞華ちゃんのため。

修紀くんはちらつと舞華ちゃんのほうを見た。

舞華ちゃんはまだエリと話し込んでいる。

すると、修紀くんは頭をかきながら一息おいて

「……わかったよ。アカネがそこまで言うなら」

「ほんとに？」

「うん。あ、でもまだ舞華に言うなよ。」

思わず舞華ちゃんのところ走りだそうとした私を修紀くんが止める。

「え？なんで？」

「20球ちゃんと集中させるためだよ。」

「あ、なるほど。」

修紀くんはそう言つと、足場をならしながら舞華ちゃんの方をむいて

「舞華、続きやるぞ」

「あ、うん」

エリと話していた舞華ちゃんに声をかけると、マスクをつけ、練習を再開した。

- - - - -

シユン・・・

今の舞華ちゃんの気持ちを表すところな感じ。
結局17球目に後ろにはじいてしまった。

でも、ガツクリと肩を落としている舞華ちゃんのもとに修紀くんが歩いていく。

「・・・・・・・・舞華、明日の午後空いてるか？」

「え？」

舞華ちゃんがすっとんきょうな声をあげる。

「明日の放課後オフなんだよ。舞華は？」

「特に予定ないけど・・・」舞華ちゃんはまだよくわかってないみたい。

「じゃあ、商店街の広場に16時な」

「・・・うん」

舞華ちゃんはまだ状況がのみこめてないみたい。

「よかったね！」

「わっ！」

いきなりエリが舞華ちゃんに抱きつく。

「こら、エリ。舞華ちゃん防具でしんどいんだらか」

「いいじゃん。ね、舞華ちゃん」

「は、はい／＼／」

エリに抱きつかれている舞華ちゃんは迷惑そうな顔は全くせず、満面の笑みがこぼれていた。

兄妹！！（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

次回はなるべく本キャラも出せるように頑張ります。

はい？（前書き）

やっとできました。

どこかで2話に分けようか迷いましたが、結局1話にしました。

携帯だけで書いたので、誤字脱字激しいとおもいます。

指摘などあればどんどんお願いします。

はい？

キンコンカーンコン

現在時刻 15:30

SIDE 舞華

6時間目が終わって、今からは放課後が始まる。
みんなは部活や塾へと忙しそうに教室を出ていく。

私は地元のクラブチームに所属しているから、中学の部活には入っていない。

放課後はお父さんの勤めるスポーツセンターに通って、トレーニングしている。

「舞ちゃん」

私が席を立とうとすると、1人の女の子が来た。

岡田秋菜ちゃん。

私の親友で、クラスメイト。

兄さんと秋ちゃんのお姉さんが同級生。

いきさつはよく分からないけど、私が入っているチームのマネージャーをしている。

お父さんのところにはいつも一緒に行っている。

「なに？秋ちゃん」

「今日おじさんとこ休みでしょ？遊びに行かない？」

「あ、・・・ごめんね今日はちよつと約束が・・・」

「そつかあ・・・じゃあ仕方ないよね・・・」

シヨボンとする秋ちゃん。なんか申し訳ないな・・・。

と思っていたら、秋ちゃんはいきなりクリンと振り返って

「お兄さんに甘え「わー！！！」ふがつ！？」

「なんで言ってるのよ!？」

「舞ちゃんのお兄さん好きは有名だからね」

秋ちゃんは「楽しんでおいで」とだけ言い残して教室から出ていった。

まったく、お姉さんとは対照的な性格してるわね・・・。

現在時刻 16:00

桜ヶ丘高校最寄り駅

SIDE 修紀

「遅い・・・」

舞華のほうが駅から近いのに、どこで油売ってるんだ。

電話しようと携帯を取り出そうとしたとき、向こうの方から走ってくる人影が見えた。

「ごめんね、遅くなって」

呼吸を乱しているところを見ると、どうやら学校から走ってきたらしい。

「バスなかったのか？」

「校門で担任に捕まっちゃって・・・」

「なんかやらかしたのか？」

「何もしてないよ!」

怒鳴ることはないだろ。

「体育祭の実行委員会のことだって」

「ああ、あのめんどくさいやつ」

うちの体育祭はとにかくめんどくさい。

町丸々でやるので、町内会に挨拶回りやら、小学生との交流やら仕事がたくさん多い。

「秋ちゃんに捕まっちゃって・・・」

「ああ、岡田の妹か」

「まったく秋ちゃんは……」

舞華は岡田の妹のことでぶつぶつ言いながら、映画館の方に歩きだしたので、なんとなく相づちをうちながら一緒に歩いて行った。

――――

「何でこれにしたんだよ……」

「だって観たかったんだもん」

満面の笑みでチケット売り場から出てくる女子中学生。
はつきりと聞いてしまった。

「バイオ。ザードEX、学生2枚で」と。

どこの世界に満面の笑みでホラーを観る女子中学生がいるんだ……。

うちの妹か。

「あつ、でもだいぶ時間あるね」

舞華が持つてるチケットには18時開演と書いてある。
1時間半ぐらいあるな。

「どこかで時間潰すか・・・」

「あつ、じゃあ」

「？」

――

「どうぞ」

「わっ、わ／＼／」

店員さんが舞華に優しく手渡す。

舞華の腕の中でちよつと暴れたが、すぐにおとなしくなった。

舞華に連れられてやって来たのは映画館の傍にあるペットショップ。

割と大きく、結構種類も多い。

「えへへ／＼／」

優しく犬を撫でている舞華。

なんか久しぶりに舞華の女の子らしさを見た気がする。

犬も気持ち良くなったのか、舞華の腕の中で眠そうにしている。

舞華が犬を抱いている間、とりあえずうつろうつろしていると、小さいほ乳類を扱っているコーナーに着いた。

そこで、よく知っている姿を見かけた。

「ムギちゃん抱き締めすぎ！」

「死ぬぞ！つて溼も！！」

軽音楽部ご一行様。

なにやってんだろう。

「あ、こんにちは」

軽音楽部の2年生が俺に気づいてあいさつしてきた。
また、それに気づいた平沢がこつちをむいた。

「あ、修くん！」

「お前らなにやってんだ？」

「トンちゃんのエサ買いに来たんだよ」

「トンちゃん？」

豚か？

「スツポンモドキっていう亀です」

2年生がトンちゃんが一体何なのか教えてくれたが……こいつの名前何だったつけ？

「亀はわかったけど……なあ2年生」

「私は中野梓といいます」
聞く前に答えてくれた。

なんか軽音部で1番まともそうだ。

「中野」

「はい？」

「確か俺とお前って初めて話すよな？」

「はい、初めてですよ？」

「修紀は桜高では超有名だからな」

つと、ここで田井中が会話に入ってきた。

琴吹と秋山の方を見ると、ウサギを返しているの、動物を絞め殺してしまうという心配がなくなっただからだろう。

「はい！いろんな雑誌に載ってますし」

すると、中野は鞆の中をあさりだし、一冊の本を取り出した。

「おつ、それに載ってるのか？」

「はい！たしか・・・」

中野はパラパラパラとページをめくっていく。

本の表紙には『高校野球』とだけ書いてあり、選抜優勝投手がでかでかと写っている。

「ってか何でそんなの持ってるの？」

「あずにゃんは高校野球大好きなんだよ」

「ふん」

「あ、ありました！」

そういつて中野が雑誌を近くの台の上に置いた。すると、軽音部の面々が台を囲うように集まる。

「ドラフトスカウトレポート？」

平沢が疑問の声を出す。

「プロ野球選手候補ってことですよ」

「しかも、かなり評価高いな」

秋山があごに手を当てながら言う。

なんか自分の通知表見られてるみたいで恥ずかしいな。

「兄さん」

「ん？」

パツと後ろを見ると、子犬を抱いて、子猫が肩にリス？が頭に乗っかっていて、しかも横に大型犬がついてきてる舞華がいた。

「どんだけ懷かれてるんだよ。しかも何でボルゾイがいるんだ」

「へ？」

舞華の横にいる大型犬は舞華の肩ぐらゐにまで高さがある。どこにいたんだこの犬。

「ひいひい」

「漣……」

ボルゾイにびびってしまった秋山が田井中の後ろに隠れてしまった。

「よしよしよし、はいお手!」

平沢はいつの間にかボルゾイをてなづけてるし。

「河野くん、この子は?」

平沢を後ろから見ていたら、琴吹が話し掛けてきた。

「妹の舞華、中3」

「へー妹いたんだ」

「なんだよ田井中」

田井中が意外そうにしている。

「だってさ、修紀って弟がいそうじゃん」

「あ、わかるわかる」

田井中の言葉に琴吹も同意しているが、俺にはよくわからない。

「兄さん、そろそろ時間……」

「お、あと15分か」

舞華に言われて携帯を開くと、開演まであと15分になっていた。

「どこか行くのか?」

復活した秋山が聞いてくる。

「映画だよ。妹の付き添いで」

「何観るの？」

平沢が聞いてきたけど、タイトルを言うと、せっかく復活した秋山がまたスイッチ入ってしまうんじゃないや・・・

「バ。オザードEXです」

「ひいひい」

「やっぱり・・・」

「？」

舞華はよくわかってないみたいだけど。

それを見ていた田井中がにやつと笑った。
何か企んでるな。

「じゃあ私たちも観にいきましょう！」

「いいね」

「さんせ」

「私も観たかったんです」

「やっぱりな・・・」

軽音部みんな賛成してるし。

「絶対いやだ!!」

絶対言うと思ったが

「はいはい、澪ちゃん行きましょね」

「いっやだ!!」

抵抗むなしく、秋山は田井中に引きずられるようにして映画館に連

れていかれていった。

秋山が映画館の席に座った瞬間に気絶したのには誰も気付かなかった。

つてか気絶って・・・そこまで嫌だったのか・・・。

――――

俺と舞華は映画を観たあと、軽音部と別れ、電車に乗っている。
最寄り駅からは自転車で帰るのだが、舞華は疲れてしまったのが、俺にもたれかかって眠ってしまっている。

あと一駅か・・・。

「舞華、もう着くぞ」
体を軽くゆする。

しかし、熟睡しているのか、全く起きそうにない。

『まもなく。。。』
車掌のアナウンスが聞こえてきた。

どうしようか、もう駅が見えてきた。

電車の速度がだんだんとゆっくりになっていく。
完全に停止すると、プシューという音を立て、扉が横に開く。

「仕方ないか、よいしょっ！」

舞華を背負い、バックを2つ肩に掛け、電車を降りた。

幸い自転車置き場まではたいした階段もないので何とか行けそうだ。

ただ、自転車どうしようか・・・。

さすがに舞華を背負って自転車2台は押せないし。

とりあえず駅を出て、自転車置き場にむかおうとすると、見慣れた姿があった。

「修紀くん」

「アカネか？」

アカネはバレー部の白いジャージ姿で駅前に立っていた。
いや、待っていたのか？

「何してんだ？」

「おばさんに頼まれたの。迎えにいつてあげてって」

「母さんが？」

「うん、修紀くんが大変だろうからって」

「確かにちょうど困ってたけど・・・」

あのおばはんは超能力者か何かか？

「舞華ちゃん、ぐっすりだね」

アカネが背負っている舞華をのぞきこむ。
舞華はまだすやすやと寝息をたてている。

「電車に乗ったらすぐに寝たよ」

「楽しくてはしゃぎ過ぎたんだよ。舞華ちゃん、楽しみにしてたから」

ペットショップや映画、そのあとに軽音部と喫茶店に行った時以上にテンションが高かった気がする。
表情に出にくいから、わかりにくいけど。

「じゃあ帰ろっか。自転車だね、とってくるから待ってて」

「ああ、悪いな」

「ううん」

アカネはニコツと笑うと、そのまま自転車置き場に走っていった。

――――

「ほんとによく眠ってるよね」

鞆は自転車に載せ、1台は俺が、もう1台はアカネに押しもらっている。

舞華は相変わらず俺の背中では眠っている。

「なんか昔を思い出すな」

「いつもエリと4人で遊んでたよね」

「そうそう、帰る頃になったら舞華がおんぶしてって言ってきた」

「舞華ちゃん、帰り道でいつも寝ちゃってたよね。修紀くんの背中
で」

「あん時は軽かったな・・・」

「それ絶対舞華ちゃんの前で言っちゃダメだよ」

「わかってるよ。ところでアカネ」

「なに？」

「さっきから気になることがひとつ。」

「どうやって母さんお前に連絡したんだ？わざわざ電話でもしたのか？」

「う、えつと・・・」

「なんか言いづらそうだな。」

「質問が唐突すぎたかな。」

「あ、あのね、実はウチのおじさんが海外赴任になっちゃって」

「うん？」

「それにおばさんもおじさんについていくことになって」

「家に私しかいなくなっちゃったから・・・」

「・・・から？」

「から・・・」

「・・・から？」

「から・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・おい」

「今日から修紀くん家にお世話になります!!!!」

「うおっ!?!?・・・ってはい？」

はい？（後書き）

大台「・・・・・・・・」

修紀「しゃべれよ・・・」

大台「唐突過ぎたね」

修紀「この絡み久しぶりだな」

大台「半年空いた時期があつたからね」

修紀「てかどうすんだよ、この展開」

大台「・・・・・・・・」

修紀「いやいや」

大台「次回もお楽しみに」

修紀「うおい」

心から!!（前書き）

けいおん!!の映画を観てきてやっと創作意欲が湧きました。

お待たせしてしまつて本当にすいません。

映画のモブたちでお腹いっぱいになりました。

それではどうぞ

心から！！

現在時刻 20:50

河野家

「さて、母さん」

「どういふことか説明して」

俺と舞華は家へ着くなりすぐに母さんを捕まえ、尋問を始めた。
尋問と言えば少し大袈裟だが。

俺の横には舞華が座り、テーブルを挟んで母さんとアカネが座っている。

アカネが突如うちに居候することになった事の経緯を知っているであろう母さんを問いただそうということになった。
ちなみに舞華は帰り道で目が覚めた。

「なんで教えてくれなかったのよ」

舞華が母さんに問いただす。

でも舞華、声は怒ってるみたいだけど、顔はにやけてるぞ。

「佐藤さんの転勤は前から知ってたけど、アカネちゃんをどうするか決まってたわけではなかったのよ」

「おじさんもおばさんもギリギリまで悩んで……」
うつむきながらぼそと話すアカネ。

「それで、ウチからアカネちゃんを預かるって言ったのよ。佐藤さんにはいつもお世話になりっぱなしだったし、アカネちゃんを独り

で家においとけないし」

「いやいや、アカネをウチにおくことに反対してるんじゃないよ」

「私たちが聞きたいのは、なんで教えてくれなかったのかってこと
そういうこと。」

「・・・ごめんね、ギリギリで決まったことだったから」

「なんでアカネが謝るんだよ」

「なぜかアカネが申し訳なさそうにしている。
気にすることないのに。」

「姉さんの部屋はどうするの？」

舞華が母さんに問いかける。

確か、ウチにはもう部屋が余ってなかったはず。
どうするつもりなのだろうか。

母さんはうーんと唸り、そして閃いたように

「修紀の部屋でいいんじゃない？」

「どこの世界に思春期の男女をひとつの部屋に押し込む親がいるか
！！」

この人にまともな答えを期待したこっちがバカだった。
あんたほんとに東大卒か？

くいつくいつ

「なんだよ」

そんなことを思っていたら、舞華が俺の制服の裾を引っ張ってきた。

「兄さん・・・姉さんが・・・」

舞華に促されてアカネの方をしてみると

「修紀くんと同じ・・・部屋・・・／＼／」

頭から湯気が出るくらい顔を真つ赤にしてトリップしていた。

「姉さん大丈夫!？」

アカネの看病はとりあえず舞華に任せて

「ほんとにどうするんだよ」

部屋がないとか居候する以前の問題だ。

「とりあえず舞華の部屋で寝てもらっわ。今のところは」

「それしかないよな・・・」

と、いうわけでアカネはとりあえず舞華の部屋で過ごすしてもらった。
とに決まった。

- - - - -

「こうしてみると何か新鮮だね」

「俺の部屋がか？」

風呂に入って寝巻き姿になったアカネが俺の部屋に入ってきた。
今は髪をほどいて下ろしている。

あのあと舞華が無理やり風呂に連れて行って、一緒に入ったようだ。アカネは風呂から上がったときには復活していた。

「あ、これ懐かし」

部屋に入ってくるなり、勝手に部屋を物色し始めた。

どこか動きがぎこちない気もするが

「そういえば修紀くん」

「ん？」

「私のグローブ使ってくれてるんだよね？」

「うん、ピッチャーのときだけけど」

そう言つて、俺はベッドの下からカバンを引きずり出し、チャックを開ける。

そして、中からグラブ袋を取り出した。

「ほい」

そのままアカネに手渡す。

アカネは袋を受け取ると、中からすっかり色あせてしまったグローブを取り出す。

「・・・・・・・・」

グローブの中にある刺繍を見つめている。

「なつかしい？」

「・・・・・・・・うん」

俺はキャッチャーミットとボールを持ってベッドにドカッと座る。すると、アカネが横に来て

「横・・・いい？」

「ん」

「ありがと」

俺が少し横にずれると、アカネはグローブを抱えながら横に座った。

「修紀くんずっとこのグローブ使ってくれてたんだね」

「何かこのグローブを持ってマウンドに上がるといいピッチングができるんだ。ふたりの思いがこのグローブに詰まっているから」

アカネが去っていったあの日、アカネは出発前に俺にこのグローブを渡してきた。

何も言わずに。

俺もアカネが何を言いたいのかがわかっていた。

あの日から俺は投手のときはずっとこのグローブを使っている。ふたりの思いがこもったこのグローブで、夢を叶えるために。

「最後の夏、絶対に連れて行くから甲子園」
アカネにボールを手渡す。

最後の夏、最後のチャンス。

今まであと1歩のところまで敗れてきた。

この夏は絶対に負けるわけにはいかない。

「うん、楽しみにしてる」

アカネはニッと笑って、すっと立ち上がる。

そして大きく一回伸びをして

「ん、そろそろ戻ろうかな。舞華ちゃん待ってるだろうし
俺にボールを投げ返すと、扉の方に向かって歩いていく。」

「グローブ一晩だけ貸してね」

「・・・別にいいけど」

・・・。

「ア、アカネ」

「なに？」

扉に手をかけようとしていたアカネが振り返る。

昨年にエリに言われた言葉を思い出した。

『修紀ってアカネと付き合ってるの？』

『いきなりなんだよ』

『ちゃんと付き合ってるのかってこと。形式上』

『いや・・・付き合ってるはない』

『はあ、やっぱりね』

『な、なんだよ』

『修紀、いつまでなあなあな関係でいるつもり？』

『そ、それは・・・』

『幼馴染だからって、いつまでもそのままじゃいられないよ』
『・・・・・・・・』

『幼馴染だから言い出しにくいっていうのもあると思うけど』
『焦らなくていいから、いつかちゃんと・・・ね？』

『・・・・・・・・ああ』

「あ、あのさ」

緊張で声が震えそうになる。

「なに？」

1回深呼吸して、心を落ち着かせて

「俺はさ、ずっとこのまま、今までどおり楽しく過ごせたらいいかなって、そう思ってたんだ」

「でもさ、高校卒業したら別々の進路に進むだろうし、もしかしたらかなり遠いところに行ってしまうかもしれない。そしたら今までみたいに一緒にいることもなくなってしまうかもしれない」

「まだ先の話だけどさ」

「・・・・・・・・」

アカネは真剣に聞いてくれている。

「だからさ、ちゃんと言つときたいんだ。後悔しないように、これからのために」

「・・・・・・・・うん」

伝えたいことをはつきりと

「俺、アカネのことが好きだ」

「……う」

アカネの瞳がだんだんと潤んでいき、頬が赤くなってくる。

そして涙声で

「私も……私も修紀くんのが好き」

「私も、私も同じことを思ってた。卒業したら修紀くん遠くに行っちゃうんじゃないかって……またあの時みたいに出会えなくなるんじゃないかって」

「アカネ……」

「私決めた」

「何を？」

アカネはグッと拳を握り締め

「卒業しても私、修紀くんについていく。一生、どこへだって」

「だって……修紀くんの彼氏になれたんだもん」

泣いていたアカネの顔はいつの間にか笑顔に変わっていた。

「アカネ、俺な、甲子園に行けたらプロの志望届けを出そうと思ってるんだ」

まだ親にも先生にも話してないけど。

「ほんとに？」

「うん。もしプロになれば北海道かもしれないし、九州かもしれない。それでもついてきてくれるか？」

「うん！もちろんだよ！！」

即答してくれた。

本当に告白してよかった。

勇気をだしてよかった。

「でも選ばれなかったら元も子もないよね」

まったくだ。

痛いところについてくるよなあ。

でも

「なるよ、絶対。どんなに遠回りしても」

大学からでも、社会人からでも、独立リーグからでも、チャンスがある限り。

「……うん」

とにかくこの夏は甲子園に出場することが最低条件だ。

無名校のうちが注目されるためには何としても勝ち残らなければならない。

もし、高校でだめでも大学からのスカウトがあるかもしれない。

「修紀くん……」

「ん？」

アカネに呼ばれ顔を上げた瞬間……

……確かにアカネの唇が、触れた。

「おやすみ、修紀くん」

アカネはそのまま部屋を出て行った。

部屋を出て行ったときのアカネの顔は、廊下の明かりで影になってよく見えなかった。

「ふう」

ばたつとベッドに横になる。

「……まだときどきしてるな」

「それにしても、ほんとに」

『よかったね！兄さん！！』

「ってうわあ！！ま、舞華！？」

バツと起き上がると扉のところに舞華が立っていた。

まったく気づかなかった……。

「いつからいたんだよ！」

「え？え」と、昔の約束のところから？」

「ほぼ最初からじゃねえか！」

にやにやしながら言いやがって。

「ふふふ、兄さんにも春がきたか。お幸せに」

「うつせー！早く寝ろ！」

不気味な笑い声だけを残して舞華は去っていった。
あいつあんなキャラだったか？

「あいつのことだから母さんにも言いそうだな」

明日の朝を覚悟しながら布団に入った。

薄れていく意識の中でこう思った。

明日の朝は何か言われる前に家を出ようと。

翌日の朝、こっそり家を出ようとしたら母さんに首根っこを掴まれて尋問された。

何回も同じ質問を繰り返すので腹が立って、母さんが席を立ている間にこっそり抜け出してやった。

「修紀くん！」

家を出ると、アカネが自転車にまたがって待っていていた。

「時間大丈夫か？」

庭から自転車を引っ張り出してくる。

「うん、まだ大丈夫」

「そ、そっか……」

「・・・・・・・・／／／」

なんかぎこちないなあ。

「うし、行くぞ」

「う、うん！」

自転車にまたがって、学校へと自転車をこぎだした。

まだまだぎこちないふたりだけど、いつまでも一緒にいれたらいいなあ。

心からそう思った。

心から!!（後書き）

次回からやっと本題の部活に入ることができます。

まずはバレ―部、頑張らねば

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6501o/>

モブおん！！only-all-original

2012年1月13日01時53分発行